

改正月令博覧 正延部

内閣文庫			
番 號	和	11036	
冊 數		16	(1)
函 號		202	287



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale

© Kodak, 2007 TM: Kodak



綴じ部(喉部分)の文字など開きが不鮮明な箇所あり

貝原先生歲時增選
鳥飼洞齋翁編述

改正月令
博物筌 全部

此書を甲子年彫刻スレトモ
艸稿駁雜ニシテ具傳寫ノ誤
少ナカラス故ニ此度左ニ録スル
諸先生ノ校閱ヲ經テ再訂ナ
シ改正ノ二字ヲ蒙ラシム此書
正シクナリタルヲ好タニテ佳作
ヲ贈給ハルヲ次ニ記ス

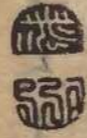
一年三百六十日日
日無邦無故實時令
娛遊及國風偉哉抄
録又細帙

後應道題

採觚箋費細
工夫業就堪
供詞客厨時
令天文盤托

出能魚州本
帙分一區蔡邕
它子帳中秘
張說平生掌
稟珠寄語風
流多執子休
為博物小人
儒

南豐題



明治十二年購求

日初月為是
事浩瀟古性
正々備哉燦

爛 恆樂

Handwritten notes in cursive script, including the characters '道孝' (Michikata).

水滸竹園氏 道孝

世にありて有るはこれなり
すくもてはこれなり
か入るもその所なり

流と見よありとけり
とて宙よりあり

とらやうしてあり
そのらうてあり

華春
海國齋叢雅

世にありて有るはこれなり
すくもてはこれなり
か入るもその所なり

月や月やをきと 井眉
のこもくふれし

○俳諧大意並口傳

一此書の詮とどり処に歳時月令の正節と明らかと改小曆の二十四節禮記之月令と筆小記一草木花実の時日と不差記と詩歌連俳の季節と定るもの相違せりもの所ら故小各傍小用々用ゆる印を委しとありと

一連歌俳諧者流小季と定る節と究むるとい原案懐紙二順の見渡一の為小二條家小らとてその分置れ小後普光園極政新式と著し給ひ後常恩寺太閤迄加なるとい肖栢老人今案と加るして其式既不定とらたえり和歌小年内立春ハ春をいとも連俳ハ冬と守杜若ハ和歌ハ春をいとも連俳ハ初夏と守○牡丹ハ春小も出夏と守りあり

連作れんさくの初夏の景物と定さだ既いふ
宗砌法師の句くハ

春はるの夕ゆふのたゞの夕ゆふやぬをま
とぬりしゆも深こほき詠うた有あり詩うたと
歌うたハ一章一首のりのりの連れん歌かと
百句はねねのりのり名な多た詠うた諧わい諧わい又
式しきを連れん歌かの擬ぎと然しかるる不ふ夏なつ冬ふゆ
ののたたの景物けいぶつ少すくく懐紙わいし乃見なりみ
淺あししのの景けいぶつ物ぶつ少すくく懐紙わいし乃見なりみ
の巻頭まきだてが半内はんない立た立た春はるのの連れん歌か
ハ冬ふゆと定さだ雪ゆき月つき花はなの三さん夏なつ及およ
む守まも故こハ燕つばき子こ花はな牡丹ぼたんと夏なつ
とん中ちゆう女にょ私しハはささむむるる事ことハ
ららのの御傘ごさんとるとるの草くさ小過せうかと
とる申まをさされれとるとる校文けうぶんの内うち秘ひ授じゆ
口くち尖せんハ及およんんてての文ぶんののりりを
厭いとひひ畧りやくせせるるも多たし追おて博はく
物ぶつ全ぜん補遺ぼいと出いて悉しつく註しゆと
凡例終

引用書籍目録

此こ各かく本ほん文ぶん注しゆ解かいトモ一々出い出でるる記き
サズト金かねトモ一事モ安やすリニ筆ふでスルニ
非ひス左ノ各ノ内ヨリうち板いた各かくス此各
編へん述じゆつニテヨリ凡三十年ノ間ま儒者にゆうしや佛者ぶつしや
和学者わがくしや職原家しやくげんけ哥人かじん俳人はいじん天文者てんぶんしや
其外諸先生ノ訂歩ていぶ歴れきテ漸しぜんク當年當年各成

万葉集	古事記
日本書紀	日本歳時記
文德實録	三代實録
拾芥抄	五家髓腦
延喜格式	源氏物語
伊勢物語	栄花物語
枕草紙	徒然草
北一代集	藏玉集
莫傳集	新撰六帖
夫木集	定家三部各

頓和名	筑波集
大和本草	本草細目
本草拾遺	花鏡
卿茶本草	採取月令
月令廣義	輟耕錄
三才圖會	前後漢各
階各	唐各
染各	後晉各
字彙	爾雅
博物筌	五經
四各	法花經
涅槃經	華嚴經
杜律	李白集
白氏文集	唐明詩集
文選	引各目錄

月令博物筌大意

此書正月門松ヲ九月終迄
 年中ノ歳事故事ヲ集ム上禁中
 公事故實ヨリ下四民諸式法月
 令ノ草木種類花形其外何ニ依文ニ
 記異名漢名迄不洩集二月
 一冊トシテ正月ヨリ十二月迄十冊分
 一草木種類花形其外何ニ依文ニ
 一各分リ種キモハ夫々圖ヲ出ス
 一條毎ニ哥ノ詞連哥ノ能借
 在哥詩詩聯故事ヲ夫々ニ加ヘ
 作例證據トス
 一花ノ正式衣服正式養生法食
 物善惡料理獻立年中ノ吉凶米
 豊凶ヲ知法草木指擡菓物
 貯ヤウ妙術妙采風雨ノ考
 等何モ月々日々ニ記ス
 一年中公事余草木ノ生類其外何ニ
 不依是道能借ノ季ニ用ニ來物ノ印

月令 凡例目録
 一 凡例目録
 二 凡例目録
 三 凡例目録
 四 凡例目録
 五 凡例目録
 六 凡例目録
 七 凡例目録
 八 凡例目録
 九 凡例目録
 十 凡例目録
 十一 凡例目録
 十二 凡例目録
 十三 凡例目録
 十四 凡例目録
 十五 凡例目録
 十六 凡例目録
 十七 凡例目録
 十八 凡例目録
 十九 凡例目録
 二十 凡例目録
 二十一 凡例目録
 二十二 凡例目録
 二十三 凡例目録
 二十四 凡例目録
 二十五 凡例目録
 二十六 凡例目録
 二十七 凡例目録
 二十八 凡例目録
 二十九 凡例目録
 三十 凡例目録
 三十一 凡例目録
 三十二 凡例目録
 三十三 凡例目録
 三十四 凡例目録
 三十五 凡例目録
 三十六 凡例目録
 三十七 凡例目録
 三十八 凡例目録
 三十九 凡例目録
 四十 凡例目録
 四十一 凡例目録
 四十二 凡例目録
 四十三 凡例目録
 四十四 凡例目録
 四十五 凡例目録
 四十六 凡例目録
 四十七 凡例目録
 四十八 凡例目録
 四十九 凡例目録
 五十 凡例目録
 五十一 凡例目録
 五十二 凡例目録
 五十三 凡例目録
 五十四 凡例目録
 五十五 凡例目録
 五十六 凡例目録
 五十七 凡例目録
 五十八 凡例目録
 五十九 凡例目録
 六十 凡例目録
 六十一 凡例目録
 六十二 凡例目録
 六十三 凡例目録
 六十四 凡例目録
 六十五 凡例目録
 六十六 凡例目録
 六十七 凡例目録
 六十八 凡例目録
 六十九 凡例目録
 七十 凡例目録
 七十一 凡例目録
 七十二 凡例目録
 七十三 凡例目録
 七十四 凡例目録
 七十五 凡例目録
 七十六 凡例目録
 七十七 凡例目録
 七十八 凡例目録
 七十九 凡例目録
 八十 凡例目録
 八十一 凡例目録
 八十二 凡例目録
 八十三 凡例目録
 八十四 凡例目録
 八十五 凡例目録
 八十六 凡例目録
 八十七 凡例目録
 八十八 凡例目録
 八十九 凡例目録
 九十 凡例目録
 九十一 凡例目録
 九十二 凡例目録
 九十三 凡例目録
 九十四 凡例目録
 九十五 凡例目録
 九十六 凡例目録
 九十七 凡例目録
 九十八 凡例目録
 九十九 凡例目録
 一百 凡例目録
 大意終

門部分並目録之註

正月

始めの九の印は内へ其月の
 干支・八卦の其月小當る卦
 調子の其月小當る律呂・陰氣陽
 氣の生じる教と記一次其誤と解

節立

此九の印の内へ其月の節
 七十二候・草木七十二候・昼夜
 の長短・日の出入の方角と記一次
 右の註解と委しく昏く

中雨

此九の内へ節より十六日の中へ七
 十二候日出其外爰出と爰節同

日令

此部ハ其月日定りたる事ハ其月
 事五節句言・詩祭・風雨の考へ
 養生の法其外日の定る方入用の事と出

月令

此部ハ其月の定る事とあつむ
 月一ヶ月の事とあつむ

時令

此部ハ時氣拍りたる事と出
 譬へ正月の初春・餘寒
 等の事又三月の暮春・三月

正月 目錄

△齒固

正 寺 鏡餅

△門松

正 寺 注連餅

△大飴

正 寺 惠方

△門神棚

正 寺 蓬菜

△雜煮

正 寺 料物

△太著

正 寺 開豆

△如賀御草

正 寺 鱧鱒

△押鮎

正 寺 俵海鼠

△小殿原

正 寺 海鼠

△螺肴

正 寺 相鯛

△葩煎賣

正 寺 年男

△六福

正 寺 福藁

△庭竈

正 寺 福鍋

△幸木

正 寺 鬼打木

△毘沙門功德終

正 寺 若戎

△星佛

正 寺 懸想文賣

△初鶏

正 寺 楢積

△初夢

正 寺 三物連歌

△三物俳諧

正 寺 祇園削掛

△若餅

正 寺 破魔弓

△羽子板

正 寺 胡木辻子

△毬打

正 寺 毬打

△宝引

正 寺 年玉

△書初

正 寺 去年今年

△毬はく

正 寺 御降

△三ヶ日

正 寺 松の内

△春永

正 寺 藏開

△湯殿始

正 寺 弓始

△ひら始

正 寺 馬乗初

正月一日録

△看衣始 辛卯 正月一日

△春駒 辛卯 正月一日

△鳥追 辛卯 正月一日

△諷和 辛卯 正月一日

△乘初 辛卯 正月一日

△節 辛卯 正月一日

△鍛初 辛卯 正月一日

△賴初 辛卯 正月一日

△歳旦句の説 辛卯 正月一日

△若菜 辛卯 正月一日

△初寅 辛卯 正月一日

△二宮大饗 辛卯 正月一日

△臨時客 辛卯 正月一日

△真那切初 辛卯 正月一日

△天狗酒盛 辛卯 正月一日

△鏡開 辛卯 正月一日

△叙位 辛卯 正月一日

△万歳 辛卯 正月一日

△天壽生身供 辛卯 正月一日

△御修法 辛卯 正月一日

△白馬節會 辛卯 正月一日

△御弓奏 辛卯 正月一日

△七日正月 辛卯 正月一日

△御齋會 辛卯 正月一日

△大元師法 辛卯 正月一日

△女叙位 辛卯 正月一日

△空也堂鉢叩 辛卯 正月一日

△吉唇奏 辛卯 正月一日

△帳釘 辛卯 正月一日

△夷祭 辛卯 正月一日

△具足鏡開 辛卯 正月一日

正月 目錄

縣召除目 季

花朝節 季

住吉御弓 季

踏歌 季

十四年越 季

土龍打 季

御新 季

平岡御粥 季

御穂祭 季

女踏歌 季

明神々詠 季

禁裏伶人の舞御覽 季

賭弓 季

吉田社清菰 季

九日だんど 季

事始 季

解齋御粥 季

削花 季

頭柿綿 季

繩引 季

三打 季

赤小豆粥祝 季

上元 季

獅子頭神事 季

走百病 季

十六日櫻 季

八幡忌神祭 季

骨正月 季

嚴嶋祭 季

内宴 季

初天神 季

正月令 此部ふり日の定まらざる正月
一月の事とあつむ

外記政始 季

偶便師 季

初芝居 季

歳旦間 季

正月男女衣服式 此部ふり初春の時候
さくら衣 やるさ衣

時令 此部ふり初春の時候
くし事とあつむ

初春 季

春雪 季

雪解 季

山笑 季

草木 此部ふり正月一月月のこと
木のたてあつたのこ

松の花 季

正月 春異名 春由来 正

惣して本朝の古言古訓と云ふ万葉日本紀古事紀ふりてとるべし或説ふ春とつゝへ暗と云ふ空麗小暗るといふ心ありとつゝ

春異名 大皞 青帝 青皇 東君 句芒 蒼天

青陽 陽和 花蓋 迎陽 韶光

○太皞と云ふ唐土伏羲帝のこゝ

本徳の君と云ふ唐土昔より世々小日本の年徳神と祭らるる春

乃初ふ祀と云ふ禮記月令云太皞伏羲木徳君と云ふ青帝の春神

るりと楚辭不見と云ふ青皇也春の神と云ふ青皇恩澤無窮限

なご詩小作と云ふ東君郊祀志曰晉巫祀東君顔師古曰東君

日の神なりと云ふ句芒は少皞氏の子重と云ふと木神也春の神

と云ふ太皞と合せ祭らるる

○蒼天といふ氣の初て發して

色蒼々として以て稱と云ふ青陽天地の盛徳春の木有る木

色青々として以て青陽と云ふ陽和といふ白居易が詩小先遺陽和報

消息と有るつゝ花蓋といふ夏侯湛が賦ふ春可樂と云ふ雜花

以為蓋といふと云ふ迎陽と云ふ立春といふと云ふ韶光といふ部

美也云春の景色のうらやまといふ猶漢書律曆志小媚景

或ハ韶景といふもこれと云ふ

つや○瑤通ハ續漢書小見と云ふ

○解凍といふ礼記の月令小と云ふ

○新陽ハ詩學大成小出と云ふ

○微和云陶淵明が詩小出と云ふ

○華始といふ礼樂志小出と云ふ歳始

ハ公羊傳小見と云ふ歳生といふ律

曆志小出と云ふ木徳ハ震官初

動木徳唯仁 春為主 東方

と有階青帝 春見也

正月 春為主

正二

云易の説卦傳曰帝出乎震
 齊乎巽又曰萬物出乎震震東
 方也又曰兌正秋也萬物所説
 也此何と云と云震之正春也
 明者一〇陽仁者之徳小
 して春陽の氣仁の道と守〇
 蒼天といふ春の東方の正色蒼々
 然として暗故蒼天といふ〇卦ハ
 震はて震ハ木の象〇色ハ木徳
 青緑と主と云故青陽とも云
 礼記春と東郊ふひ入て青馬七
 匹用と云〇精ハ蒼龍とい神ハ
 体精ハ用也春の用ハ能發生と能乾
 の用して陽の靈ハ能動發と速盛と
 象ハ〇少陽勞陽少陰方陰の四象の
 初て春の氣ハ是少陽明厥陰と加へて
 六氣と云〇味ハ苦と酸と云〇肝ハ木屬
 春ハ肝旺と云〇死氣肝ハ入と云
 △右の外春三月の季乃りのハ三月
 の部乃と云と云と云

正月乃部

ハ春ハ有ハ木と云
リウ物也



異名

正月 瑞月 孟春 發春
 獻春 規春 開春 上春

初春 發歲 三陽 初陽 暮新月
 新陽 謹月 太簇 夏正 睦月

〇とみその月 從心月 若命月
 〇〇の月 辛卯月 初室月

異名註

〇正月と一月といはせて
 正月といふ正一きや

ハ義あり〇正月と謹月といふ正
 月ハ始を謹むべき候と云ふハ
 〇正月と太簇といふハ太いなる
 訓族と云ふと云春の陽

氣ふて万物とくみ生とる心あり
○阪月とくハ亦雅言正月の意

ハハ阪の寅のくろあり○夏正と云
唐正夏の代より寅の月と正月とする

ハハ名はくろあり○臘月とくハ冬
清輔輿儀抄ハ冬如く貴を賤しき

ハハ名はくろあり○臘月とくハ冬
ハハ名はくろあり○臘月とくハ冬

ハハ名はくろあり○臘月とくハ冬
○太師月とくハ俗人の子ハ初生

ハハ名はくろあり○臘月とくハ冬
ハハ名はくろあり○臘月とくハ冬

ハハ名はくろあり○臘月とくハ冬
ハハ名はくろあり○臘月とくハ冬

ハハ名はくろあり○臘月とくハ冬
ハハ名はくろあり○臘月とくハ冬

ハハ名はくろあり○臘月とくハ冬
ハハ名はくろあり○臘月とくハ冬

ハハ名はくろあり○臘月とくハ冬
ハハ名はくろあり○臘月とくハ冬

ハハ名はくろあり○臘月とくハ冬
ハハ名はくろあり○臘月とくハ冬

ハハ名はくろあり○臘月とくハ冬
ハハ名はくろあり○臘月とくハ冬

ハハ名はくろあり○臘月とくハ冬
ハハ名はくろあり○臘月とくハ冬

ハハ名はくろあり○臘月とくハ冬
ハハ名はくろあり○臘月とくハ冬

ハハ名はくろあり○臘月とくハ冬
ハハ名はくろあり○臘月とくハ冬

ハハ名はくろあり○臘月とくハ冬
ハハ名はくろあり○臘月とくハ冬

ハハ名はくろあり○臘月とくハ冬
ハハ名はくろあり○臘月とくハ冬

ハハ名はくろあり○臘月とくハ冬
ハハ名はくろあり○臘月とくハ冬

ハハ名はくろあり○臘月とくハ冬
ハハ名はくろあり○臘月とくハ冬

ハハ名はくろあり○臘月とくハ冬
ハハ名はくろあり○臘月とくハ冬

正月古今違

一年十二月の干支を
定ハ其月の中

ハハ名はくろあり○臘月とくハ冬
ハハ名はくろあり○臘月とくハ冬

ハハ名はくろあり○臘月とくハ冬
ハハ名はくろあり○臘月とくハ冬

ハハ名はくろあり○臘月とくハ冬
ハハ名はくろあり○臘月とくハ冬

ハハ名はくろあり○臘月とくハ冬
ハハ名はくろあり○臘月とくハ冬

ハハ名はくろあり○臘月とくハ冬
ハハ名はくろあり○臘月とくハ冬

ハハ名はくろあり○臘月とくハ冬
ハハ名はくろあり○臘月とくハ冬

ハハ名はくろあり○臘月とくハ冬
ハハ名はくろあり○臘月とくハ冬

ハハ名はくろあり○臘月とくハ冬
ハハ名はくろあり○臘月とくハ冬

本朝の神代より寅の月と正月と定めて變りて夏色此論春秋正月考と云ふ書小委一ありあは事なり見さべし

節 立春の七十二候。草木七十二候。昼夜長短。日出入等左記と



△東風解氷といふ冬寒風も水も春の東風と受て解初。蘭蕙と風蘭也。蟄虫の冬虫の地中より出る。瑞香の春の氣にてそよく出る。瑞香のちとまげへ△魚氷か上る氷の上は游といふ。櫻桃の庭櫻なり

立春天氣 立春は北方か紫線白の雲

あまの三素飛雲と云て三元君天上の詣とる日なりはるきて再拜とる一必じ福ありと隋書に見たり○三日晴天をまを

豊年○前後三日の間風雨少むまは其後四五六日の間天地の氣そののいて万物うはつりさえ又人の身も安全かて病少と

なり若又四五日以前は雨あまは其後四五日風雨少く四五日後は風雨あまは 立春占候

此日四方は黄なる雲氣あまを五穀よく實のり音と雲氣あまは虫五穀とやぐら○日いさで出づる時東は黒雲あまを春

雨多し西はあまは秋雨多し地小あまは冬雨多し○東方は

正月 立春ノ故事 正ノ七
ナリ百姓皆會春 泥牛 年
牛ヲ賣ルトイヘリ 内

ヨリ土ニテ牛ヲ依リオキ 寒氣ヲ送ルノ月令ニ見ル 燕 歲時記ニ立春ノ日悉ク 絲ヲキリテ燕ヲ依リテ

宜春ノ文 賜絲勝 唐ノ朝 字ヲ貼ス 二立春ノ日侍臣ヲ望春官ニ 召サレ春ヲ迎ル人毎ニ絲勝

花トテ依リハナヲ賜フ由 文昌雜錄ニ見ヘタリ 農 祥正 正レトハ農ニ南ノ方

ニアラハル、コナリ 國語ニ見ヘタリ 農 立春ノ日若ノ葉ノ灰ヲ律管ノ 端ニモリミテ、オケバ春氣至ル

時其灰オノツカラ 飛ヨレ 委 ンク事文類聚ニ見エタリ

歌青陽 後漢書ノ祭祀志ニ 云ク立春ノ日東ノ郊

ニ至リテ春ヲ迎フ車騎服飾ニ 大青シ青陽ヲ歌ヒ雲轡ヲ

舞フトイヘリ 歌曲ノ名ナリ

詩 立春五字對句 同上

詔光開令序 惠風初應律 唐ノ則天春ノ時令ニ

淑氣動豐年 和氣正調梅 春ノ溫和ノ時令ニ

詩 立春七字對句 詩 礎

三陽候節 金為勝氣象新 立春ノ七エタル

百福迎祥玉 作杯應陽春 年酒ヲクム

若水 新水去年ノ生氣の方此井 せど春ノ日主水司内裏ニ 奉進ハ朝餉ニされをさし

奉進ハ朝餉ニされをさし

奉進ハ朝餉ニされをさし

奉進ハ朝餉ニされをさし

奉進ハ朝餉ニされをさし

奉進ハ朝餉ニされをさし

正元 老才元日著詩言正元ハ

かり新玉の春より日奉まば若
水とふ去年より井を封し置
包井開くともいふ世俗母若水を
元日とする季くは三丁あめり

義君くるやけし河をまきしよ
いとまふけの初めあらん俊頼

元日立春 万葉
け夕夜うれびくまふりしも

建長哥合 立春 頭朝
わら玉のひも月日と移るる

春までくまふりの始めは春
排りか下はまふけの春宗因

狂 古今夷曲 野慶
春ふれといふやうくまふりの

かれも度とせけしあらん
○哥の詞ハ立春と見合用也

元日立春五字對句

同上

春城映朝日 緑仗迎春日

緑柳揺春風 細煙接瑞香

元日立春七字對句 詩癡

瑞色含春當正殿 轉綠蘋

香煙捧日在高樓 瑞色新

瑞氣朝浮五雲閣 紫氣中

朝光夜吐萬年枝 曲迎春

春風掩映千門柳 四海中

曉色融和萬井煙 象昭回

元日立春 節遊
散臘迎新淑氣回 一年程ナ

正月 年内立春詩哥 正九ノ十

又春ニ立ケテ 乾坤此日泰初開

正月ハ天地ノ氣モ三陽地ニアラハ

レ地天泰ノ卦トナル其始ハ元日也

庭前積雪徐々化 天地ノ陽

雪モノコトト 天上和風習々来

ケラヌルナリ

ソラヨリ吹ク風モアタカニソク吹来ルナリ

年内立春 元日よりまへる春乃

△十二月 節あるといふ連俳

か十二月の季と定むといふ九

和哥の式ニ準して此處ニ出と

哥 續古今 入道前大政大臣

吾ぬくたふいぢとめふをこも

そけ内なるま乃あけがの

詞 子の内ふ春よりきたぬを今

年。このまふさふ。ぞもせりてを

さぐ。そあもせまふ。けのさるに。

奉のさけはまふまふとをふ心。

傳 庭をまふを春よりあけ 宗祇

非 庭をまふを春よりあけ 宗祇

春ニつらんふるを春よりあけ 宗祇

詩 立春之詞

仙家日月本長生 仙人ノスハ

トヨリ長生ユハ日月モ

トコレナニメグルナリ 送臘

迎春亦寂然 冬ハクレ春ニ

コトモナクモノレツカニシテ各別ニ

アラタニリタルコトモナキトナリ

翠管銀鈎傳故事 仙宮

器ヲモテアソフコトハ常ノコトニテ

故事ヲアミタ云ヒツタフルナリ

金花絲勝作新年 金銀ニテ花ヲ

瘧病を除く方 立春のいふ

子の日蔓菁を搗むる汁を

とりあまぎ先て家内とを

小服とれば瘧病を除く

正月 中節ヨリ十六日メ 正ノ十一

中 七十二候。草木七十二候。日出入 昼夜長短委しく尤ふ記を



正月節より十六日まで

撫ハ常小魚とて喰ハ命とほさぐ
ゆ其思を報じると春のそと

老小魚をとりて祭るあり
徑草ハ道辺の草也青々と成ハ鴻雁

分の事ハ陽氣ふるれハ次第ハ南より北へ
帰るハ望春始放と云夏ハ初蟄と有草木

百花陽氣惠れ七梢芽立ち萌動之
花の初開るなりと云夏ハ初蟄と有草木

日令

正月日

の定り

千支の

定り

此部あり



湘元日異名有 鶏日 今日と鶏日
日註證哥ハ其有

方朔ク占書ハ出て八日迄悉く
名あり其日天氣和順るハ其

名づくる所の日のさくるとあま
ども其理通ハ此事貝原先

生日本歳時記ハ未女ク弁あり
見るべハ面白ク事なり

天氣 元朝々く大雪と云
早羊と云ハ一〇晴天

春の年ゆつて人民安し
風雨とれ米價貴し○微風
細雨とれ梅雨の内日和長し
秋洪水あり○三ヶ日の間風雨
さくさりて日色と見え二年
の大美をたのむ事○四方晴天
自然と和氣ありて春のけき
うららかなる豊年とす雨みも
あびて黒くかりて陰々
も又美なり○東風吹は夏に至
る米價賤し○南風吹は春
より夏小なりて米價いやく
又旱をばりささる西風よけは春
より夏の米價貴し豆は能實
のく北風よけは水の災あり○
今朝東北より風吹は五穀熟し
て年豊あり西南の風吹は大水あり
て耕作のさむげとる東南
の風は南風吹は雷鳴て寧
むす○今朝北より大風吹を

春の中人民病ありた大風多
ども北風吹は春の中多く病わ
るへ○終日北風吹は其年とや
り病のよまある事あり○南
方より風よけは旱のまあり
○今日大風吹は蚕破して糸の
價貴し又五穀のよす○天晴
ま暖ありて風ふふれは五穀よく
熟し米價賤し人民安全
めで病もさくゆとるなり○今日
雪とれは豊年又
占候 元日甲
旱とつること
ま米價賤し或は人民疫
病を煩ふなりかわれ米價
貴し或は人民病あり病あり
されは四十日の旱なり
たまは終綿の價貴し
あり成ふわれは麦粟魚塩
の價貴さるり或は旱とる事
四十五日なり已ふわれ米價貴

元旦の寅の時皇の屬星と
 ちねへ天地四方の山陵と拜し
 たるの年災と拂ひ室祿を
 祈り申さる事小侍ふるや
 清涼殿の東階の前して屏風
 として白木の机に香花と立
 行いいふ星ととふ年中行
 合ふり當年の星本命星
 をまの七返げとふかみ事
 ごとくしり今在家の世俗星
 佛とて祭るも其まぐろを人
 らふかみととふ年中行事奇合
 ととふ星ととるかみまは京
 老りのかみひきかみととふ
 まのまかみたり**供御薬**天
 書かみの御座ぬ出御りて御衣
 を御生氣のこの色ふりく
 ささひて蒸子とていまと嫁
 せざる小女は先吞かみ一先かみ

屠蘇は小児の初
 初日の故小女初 其後銀器
 けり屠蘇と奉る二献か

白散をす先奉る三献小度
 瘴散をすかみふとかみ

年中行事 毎ふふふかみしる
 茶子かみつえつかみんかみるかみか

屠蘇白散 嗟哉天皇の弘
 仁年中に始て

これを行る一人ふとと吞め
 を一家病か一家これを吞ぬ

まの郷病をとり歳時
 記ふりひり道士毎年除夜

お間里か来り茶一貼と贈り
 紅の袋に入きて井中かみにかみ

置扱元日其袋と水中よりと
 わげ酒小和してこれを吞かみ瘟疫

を病ととる屠蘇かみはかみととふ
 蘇かみはかみととふかみ邪氣をか

ふりほり人の神ととるかみ
 ととふの理かり醫家かみに多

上小点を加へて屠蘇と書く
さき尸のまうびとよむ字をか
ゆへと思避て尸小書くとす
此某方よりく十二月の部あり

非松の子いせの末を共まき會月
を登りたまぬ御室とるをの酒は高

紫府僊人授寶方府

新正先許少

八神奉

命調金鼎

一氣回春滴絳囊

靈液夜流干

尺井

春風曉入九霞觴

將鳳曆從頭數日々持杯訪醉

瞿祐

朝拜 朝賀奏賀元日小群

拜一申さる事とる小朝拜

略儀のし殿上をうこ

公事 神武帝元年正月朔日柏

原の宮ふ都と立位より即ち道

臣の命等天瑞と妻せらるるよ

起まらるる日本記あり

新葉 たらまらるるやばうのけて

朝賀事行車をたしむるあり

よらじられ始の美代りあり

小朝拜日とるさい私さるとや

非松のたふふる

院拜礼時

仙洞にも行ひふ拾芥抄か云く院

事とる 元日節會 諸司の奏

會七曜御曆

氷槌腹赤國柶奏 ふるふるの事

と元日奏聞す 後川の奏聞

とたてのら紫震殿小渡御さうて

百官小酒となす 言音番歌合

ふ代先 ささるれさうのま

同和春のさふのさみさのり

のふよと子代のもる ささる

諸司奏 元日節會の禮お右

奏 七曜曆とい日月

七曜の事と書さる上のつひの曆

さうあまを節會小奉る事と

氷の様 聖の御代か冬水りの

去筆氷とさうて室は納せいと

節會のほいてふ奏聞とさう

其時氷の薄さ厚さを是れと

石瓦のまんと奉る事さう延喜

式は氷池風神の祭りして氷れお

と年へ大法秘法と修して行ふの

事わりし 仁徳天皇よりさう

まんと 善行集今日ぞあるひ

さのふいさるもの池の氷れさうと

詞 おさぬまると代奏さるる年まの物

齒固

餅と鏡とて
向ふこい人の齒
と以て傘しす
ゆ齒の字を
よみゆもよむ
よそいをかこ
むるよりさう



高板六本の折敷をこいの基
小大根橋とりふさう此餅ハ近江
の火まりの餅を専ら用るさう
まはよを哥小鏡山と寄てしむ
ちう在家の鏡餅ふさどゆつう
菓とをさ侍るハ清少納言が枕
草紙よゆつう菓の事とよとそ
まこよひのづるをさめぬは
てはふたたるまき一名を親子草
とよと一藏玉集みあり
あふみのやゆゆのふとそなまは
かひてぞいゆるまがふとせハ

詞 しのひゆえか見餅 齒乃木
ゆつう菓。うゝ白。大根橋。ゆえ菓。
あまこ草。よひゆゆ。やゆくさ
非 齒固やむと老いハ長袴 裸虫
狂 びらて花のか見さう餅ハ
かびくるささふるといふハ保友
鏡餅 神小供方餅と鏡の如く丸
くまを故名とハりゆゆと云
門松 △立松△ゆさう松△かさう竹
△松ゆさう△門の竹△門ゆさう



正月日令元日ヨリ上旬 正十九

狂 裏方より神人の早くとる月
ととく仲の内よりみ依 一枝

門の神棚 在家の妻戸ふ棚と
かいて祭る夜の土

器ふ灯さぐらま 蓬菜いふ
え侍る事より

蓬菜島ハ仙人の住處にて此處の
菓物と喰へ不老不死に至ると依て

年始は命遠くと祝ひて三方は種々
の物と三重ね蓬菜と名づる祝ふ

○蓬菜やまねしふ海とやぬ 可友
○圖とる外ハ諸礼 家本式の通り

蓬菜の圖



狂 俗家いふ所のさきとさきちの
蓬菜庭む着ぬけの臘月山人

△蓬菜 三方の臺のあり
とる所と正面とる

△橙 実をむまへ七八年がそ
代とつて故祝ひの物ハ

△搗栗 搗の字と勝ふりて万事
かちちとる心よていふ

△梅干 梅宝珠といふ
玉の心よていふ

△柑子 △ころかさ △昆布 乃
△柚 △野老 △海老 △橋 △串柿

右の品々かざり心とよむうかざると
春ふて元日の季より右乃内委
由來のあつ月の次ふりてくま

狂 みうらじのくところの名
ととくさしちとわせいふい

食積 蓬菜の餅はつた如く目
出度りの故蓬菜の積

○菓とのと喰へ長壽を薄ん心
つくと箸後あはまぬハ 嵐雪

狂 和志と移さ蓬菜さんやふ
まのひんまのひんまたり 丁二

海老野老

二品ノ老の字と
わやうり用さるり

殊ハ海老ノ腰のわびるの母
よりよのひ長く腰のわびし

長命のて老人事と縁の祝ふ

非ハ世多の傍々もゆし神の春親重

神馬藻

神功皇后異国と云
ゆふに船中馬珠は

よつて海中の藻と取て馬ノ牧

神馬草と名づく名はよりて年徳

神の馬小ト云てこれを傍らり

又和訓ハ穂俵といふを以て穂も

俵もめては物物さるるまを以て用

ゆらるるハ民俗をまうてやんと

つとつとハ^非やうや 橘 冬も緑

從係表とる名を禁 才 冬も緑

変らす其実赤さりのあるゆへ

祝ひの物とすむハ諸見公始

橘の姓と賜ふもこれを祝して

非^非橘ハとみよとの傍々ハ安正

齒朶

真白 齒ハ白のこも朶
山さハえとこもむら

長くえとこのづらくいふ意して是

と用る其上月朶ハ雪霜ハも

まど音きめのさき 紅 親子草

の春の祝ハ用るハ 紅 親子草

代々と譲て子孫長く繁栄の儀

とつて橙^ハ並ハ用る代々

さるハ其内ハ死むる意味あり

死の字とハ人の忌思ハハさる

とも常とありて人驚く事ハ

唐ハありろハ斬有十畳の座敷

を建ふるハ折節天台の淨慈寺

ハ書記濟顛ハ僧の通マハ

せハ主人のこ今日家移ハ

ハ吉事の祝詞とハて玉ハ

諱ハ濟顛ハわハ大音ハ云く

子有て親死ハ夫死ハて婦死ハ

此家より千口の葬と出さると

とて走マ出らハたり主人甚ハ怒

つて新宅の祝詞とよひふ却て死
をの葬といふ追ひて一棒と與
来まじ僕命す其中に老人有
て申したるこれ大ふ吉語なり必じ
怒りぬべし後子有て死せば子孫
を絶ト夫死して後婦死せばこれ
順道なりこの十疊の座敷よ
そ千人の葬と出さんといくと
くれ年敷を歴どんばあふさ事
にわらうすくは目出度語にあつ
座敷にひくひんした主人大ふさ
とつて濟顛ハ凡僧あわうさば
事とありま守く尊びけつせ
うまくとりめて世間の物忌ひ
まらあそふ中ちうるへー

新撰六帖

有家

春ふらにさしかつぬゆつとの
ゆいふらにとももろがさあしそ
⑤ ゆつりまやひか小
家の大りさう 親重

雑煮

冬年の製 置る餅
種々の品を加て煮くして

喰ふ其品國々家々の嘉例あ
る大同小異ありその加ふ品と左記

○芋頭 犬根 芋 子焼豆腐 かし栗
昆布 わりい 煎海草 たらめうき

な 牛房 あら 糠 田はくり
⑥ 餅 糰子 餅 糰子 餅 糰子 餅 糰子

狂 糰子 糰子 糰子 糰子 糰子 糰子

羹祝

羹 雜々 調へ煮るあつ
もの云々 即 雜煮の事

結昆布祝

結昆布祝 結昆布祝
元日あり 結昆布祝

芋頭

万事の司頭なる心つて祝へ
又頭と云ふ字ハ大学頭藏

人頭をくくぬあの人乃名ふ
すふ少元日は祝ふるるるる

料りの

△兩のあふ書年始に
遺示 遺示 遺示 遺示

狂春本れの冬も花青山の家にて
宿の大おくろくをみくろ 入安

若水 △井ノ水 △井ノ水 △若水 桶
△秘水 △井ノ水 △井ノ水

公事 △立春 △水 △水 △水 △水
△水 △水 △水 △水 △水

連 △元朝 △水 △水 △水 △水
△水 △水 △水 △水 △水

福藁 △福 △藁 △藁 △藁 △藁
△藁 △藁 △藁 △藁 △藁

庭竈 △民家 △庭 △竈 △竈 △竈
△竈 △竈 △竈 △竈 △竈

福鍋 △福 △鍋 △鍋 △鍋 △鍋
△鍋 △鍋 △鍋 △鍋 △鍋

幸木 △幸 △木 △木 △木 △木
△木 △木 △木 △木 △木

鬼打木 △大御 △玉 △木 △木 △木
△木 △木 △木 △木 △木

毘沙門功德經 △多門 △天 △天
△天 △天 △天 △天 △天

若戎 △元朝 △小
△小 △小 △小 △小 △小

星佛 △其年 △の 属
△の 属 △の 属 △の 属

懸想文 △懸 △想 △文 △文 △文
△文 △文 △文 △文 △文

星九曜星 △星 △九 △曜 △星 △星
△星 △星 △星 △星 △星

星佛 △其年 △の 属
△の 属 △の 属 △の 属

星九曜星 △星 △九 △曜 △星 △星
△星 △星 △星 △星 △星

星佛 △其年 △の 属
△の 属 △の 属 △の 属

星九曜星 △星 △九 △曜 △星 △星
△星 △星 △星 △星 △星

星佛 △其年 △の 属
△の 属 △の 属 △の 属

星九曜星 △星 △九 △曜 △星 △星
△星 △星 △星 △星 △星

賣うり 懸想文といひ元日寅の刻
より町々を賣て通る赤と

袴立烏帽子かぶとのありて是は
錢とあらはせし女メのゆいで

ういあふといひて皆祝して
洗あらいとあらうるなり今とて

句くの布さう文縁えりはきの早く
あふべきやうに祈る陰陽師いんやうし乃

祝文いわいよりされ元来もとよりの艶書えんしよのてん
俳人はいじんのいれを愛あいといひけり

任まかしむるのついで後のちのしりく
狗いぬの下したまをけりやうと貞徳

初はつ雞と 元朝げんてうのそりれ声こゑなり
昔むかしも耳みみよりうきとそり

稻いね積つみ 稲いねのつむと稲いねのつむと積つみはた
のささとほらとささるる心あり

元日げんじつの寝ねると云いふ説せつ三日とも云
修しゆ修しゆや秋あきのそまを花はなの着き子こ周

稻いねあふ 稲いねつむと同一どうい心こゝろなり
ささるる心あり

初はつ夢ゆめ 大晦日おほいそひ夜よより元日げんじつあけ
つさふてささるる夢ゆめ

年としを返かへ春はる茶ちやべとらあひ杯はひの
まましくとえてかやふの返

三物さんぶつ連歌れんか 元日げんじつ宗匠そうじやうの家いへ
機はたこれとてあ

とふ者もの或あるは弟子集でししゆり句くとま
第一句だいいちくと第二句だいにくと

三物さんぶつといひ第三句だいにくと第三と
いふ三物さんぶつあふとゆへ三物

市中いちぢうと賣うる事ことあり令しやうを
う事ことなりといふも宗匠そうじやう

の家いへ小例歳せうれいざいの式しきありて句
と作るつくなり△裏うら白しろ連歌れんかを

連歌れんかの四枚よまいの懐紙なつかしなる中なか
古ふるあやまると片面ぺんめんと書か腕うで一

又一枚またひとまいと添そへて五枚ごまいとあせり

正月一日令元日ヨリ上旬 正廿五

あのゆへは片面白紙なり
是と例としてかく名付らる

三物詐諧 右連歌本同ト又
裏白詐諧も有

元日異名註 正月朔日と
元日といふ

元といふ字もト多しトよむ也
とらゆれ日といふ事之△元三

といふ事ハ年月日のごとく
いふこと△四始といふ年月日

時の始といふ事を履端と
いふ履いふむといふ字端は

初めといふ字義を春ハ四時の
初めゆへト多しトよむといふ

事にて元日と履端といふ新
玉乃年といふ改年といふ

をるべし万葉ハ荒玉の年也
あり玉といふ月のいたりた

内たれば年のこと多しト
いふ事ゆへといふ事るべし

元日 歌連能狂言詩手紙
故事 いろくといふ

俊成
九字や玉く庭ふゆりさの
そをといつめり子代の初とる

新撰六帖 光俊
今初まればとるもとるすり衣
とるたちそむる初のみ月風

家集 元日聞鶯 西行
老めくけてとるあの新ふきて
とるの戸あふる者乃しとる

夫木 為家
年の内ふまのまにせわし玉の
とらゆるとるふかむそしとら

六百番哥合 慈鎮
百かやま成むうつさのまに
とらみり子とるの初とらつまる

拾遺集 赤人
きのふとるのひのけりけとる
とらゆるとるふまのまにとら

三朝 道遠院
五のころまのまにとるの初
月日れとる初とるの初とら

正月日令元日

正、九八九

昨夜ニハ似
ルトナリ

元日詞

蜀地寒猶

暖外地ノ中テ蜀ハ寒氣余所ヨリ暖カナリ正朝發早

梅都ハ巴二梅花發ケバ偏驚万里蜀ヨリハ又暖カナリ已復一年來

客外國ノ旅客又驚シ已復一年來

來春ノ早ク至ル今又一年張說

元日詞

元日賜群臣栢葉唐ノ制ニ

酒ヲ進ム又栢ノ葉ヲ賜フ武平

歳時記ニテ栢ハ仙葉ナリ緑葉迎春新

寒枝葉トモニ寒レ

願持栢葉壽仙葉タル栢葉ニ

長奉万年歡恩賜ノ栢葉ヲ捧

奉和正日臨朝應詔天子朝廷ニ

元日詞

右ニ同

居間無賓客起只如常地

住居スバ春ナリトテ賀シ來ル賓客モナク只朝ト起キ出ルハ平生モカクナ

ナリ桃板隨人換ニカセテカハ定タリ

ナキ梅花隔年香キ白フナリ

春風回笑語雲氣豊荒風

ハ人ノ笑物語ルニ似タリ祥栢酒何

勞勸心平壽自長心中平和ニ

ハ身命自然ニ長久ナラ仙茶ノ栢酒ナリト

新歲戯作 室旭巢

莫笑腐儒生計貧儒者ハスギヤ

貧レトガケリ今朝富貴而迎

新中々貧賤ニハナシ林頭千卷人

間樂瓶裏一枝天下春牀ノ上ニ

書アリテ此上ノ樂ナレ瓶ニイケレ梅

ノ一枝ハ天下ノ春ヲ迎テ富貴至極スレ

正月 日 今 元 日

正ノ年

詩

壬午新年

同

龍神蘆

雪後庭前柳絲黃春暗生
雪ハミレバ庭前ノ柳シケリ絲ヲタルハ
葉ノクセ付テアルハイヅレ春ノシルシ
ナリ預知佳客到喜鵲兩三聲
鵲ノ声ノヨロコビシク啼ヲキケバカ子テ
年始ヲ賀シ来ル珍客アラシコトヲ知
ルトナリ

狀賀新年之文

片カナ尺牘

去陽之陽在也
アラニホクスホウキノ
新トニ鳳紀之慶

先其地涉家門
先知
貴一眷

健履正且
深為喜盛
戸中無

定在休大年
恙渡青
年寄賀辭

新兆鳳紀之慶
謹獻椒花之

頌三元展首祓
陽春漸次

至此王春佳慶
歲序告新

貴眷有屬
六戚健履正且

動止佳祐亦逢春
清勝入

新年深為喜盛
不堪攸躍

至慶至喜
戸中無恙
陋巷因

舊寒舍守常
私第幸無事
渡青年
斗柄東建
轉和氣
偶致一封
投魯封
致手啓

⑤慶捧半箋 寄賀辭 ⑥不勝相

祝 ⑦聊此由賀 ⑧為以祝壽之

證 ⑨任遲且 ⑩他日期春遊 ⑪須

約尋芳日 不勝九頌 ⑫臨措快

々 ⑬呵硯皇恐 ⑭拜替首 ⑮頌

首 ⑯不備 ⑰誠恐誠惶 ⑱死罪々々

⑲新年之文返事 在漢文尺牘

為 ⑳年南之由 祝詞

早 ⑳辱 ⑳誨 章 賀

新考札 亦あ見仕い此作

三朝

於此交目あ度 ⑳納い先奴

万壽 更任命 記得

多慶頻 至將俟

貴府 門應 各佳健

廣涉跡 歲深き存存在 行約

多慶頻 至將俟

永陽 ⑳耐人 ⑳名 ⑳信 ⑳後 ⑳々

三春之行樂 謹此伏候

早辰 ⑳速得賜書 ⑳伏羨 ⑳

榮礼示 ⑳辱枉 ⑳已蒙 ⑳誨章

⑳教示 ⑳來書 ⑳珍贖 ⑳家鶴

三朝 ⑳履端 ⑳淑節 ⑳任命 ⑳若

諭 ⑳蒙命 ⑳貴府 ⑳仙縣 ⑳錦里

⑳邦郷 ⑳門庭 ⑳郵第 ⑳澄家 ⑳黄堂

或人の説は年始狀の結語は期永

日之時侯あつひ期永陽之時侯

と世間普通は書來是とも期永

日侯と云々ふて濟しと云々之時

の二字重言のやうなるもの

侍ると云々尤も有ること

正月一日金元日

正月廿二

扶 新年自作詩哥送文

新曆吉兆亦寄休給以今朝

甫歲上休兆

有校姑身身為衣布打相

鶯花競好

鳥一之試毫任以竹以然涉

寄鄙詞 以投几下

月以空處以所削不希以不之

拜 七 慈 斧

甫歲 鳳曆 三春 上吉兆

令辰 嘉令 朝來 今辰 發起

鶯花 黃鸝 繞芳樹 梅鶯 賦朝暉

偶強 干時 即 偶然 寄 作 賦

述 鄙 詞 章 一 絕 鄙 語 野 詩

投 呈 汚 奉 告 几 下 閣

下 座 右 顧 盼 拜 恭 上

謹 敢 以 慈 斧 潤 色 斤

正 請 正 不 律 不 真 草 不 宣 不 悉

扶 同 返 事

涉 祝 頌 之 玉 交 亦 存 人

朵 雲 辱 嘉 辭

仕 以 何 之 羨 新 著 梅 花

鶯 花 葉

休 長 閑 亦 兼 文 以 何 以 以

春 光 遲 寄 即

與 之 佳 唱 之 趣 投 也 不 存

事 之 詩 興 趣

感 賞 之 以 半 不 淡 納 並

不 減 古 人 暫 留 之 干

ヤ作
紫上

朵雲 尺素 尺書 辱命 紙命

嘉祥 壽儀 祝詩 壽章 鶯花

花開 鶯嬌 影悠然 黃鳥日

轉白梅風綻 辱 被投 賜 寄

即事 即真 對景 任真 衆感

興趣 風調 推音 不減 古人 不讓

暫以田敢作家珍 拜置千座若 納賞重

右手紙 必ともし 不真字とつひ
てありこの真字は漢文を次で贈る

如此 文章とめと出 書替又ハ
異名あり 上中下のあり 故ふ
方同輩 目下の書ハ多ク 係一
あつと上中下小拘る事ふてり

兄合一々書

歳旦



鮑宣傳云 鶏卵
戸上ニ貼リ符ヲ升ニ

ハ廿六百鬼オソル其上ニ葦ノ索
ヲカケル之故ニ葦索トモ云フナリ

仙木

桃符 桃板 桃梗 皆同じ
桃糸 桃ケツリ符ヲカキ

テコレヲ仙木ト云フ百鬼恐ル
所ナリ是ヲ元旦ニ立テ邪氣ヲ

フセツナリ 桃板ニ書法士民并
ニ儒者僧家トて書ベキ文皆

日本歳時記
ニ委シクアリ

ナドモ又菜盤トモ云フ松栢椒
花菜根芹等ノ生菜餅ナドヲ

盤ニ盛リテ相贈リシヨリ云
本草綱目ニ葱蒜蓼蒿芥是

ヲ盛 饌ヲ五辛盤ト
イフ迎新ノ儀ヲ取ルニ

商人清湖君ニ女ヲ乞ヒ得タリ
商人欲キモノ有テ求レバ此女ナ

和

ニ、ヨラス興へスト云フナシ依
テ其名ヲ如願トヨフ常ニカクノ
如シ然ルニ元朝ニ至テ如願ヲソ
ク起キ出シテ商人怒リテ追打
シニ糞壤ノ中へニテ入りテ其跡
カタチナシ後人細繩ニ人形ヲカ
ケテ糞ノ中へナゲイレ令

椒酒

如願ト云フナシケルトゾ
椒酒ハ椒觴ナド云フ椒ハ玉簪星ノ
精ナリ是ヲ服スルヲ屠蘇酒ヲ

モチユル
ニヒトシ **神茶** 度朔山

ニ桃ノ樹アリ大キサ三千里東
北ニ二神アリ神荼鬱皇トイフ
コノ神百鬼ヲクワトナリコレニヨ
ツテ此圖ヲ画キテ凶魅ヲフセツ
コレ本朝鬼門 **放生** 耶那
ノ據トスルニヤ ヨリ

歳朝ヲ以テ雀ヲ趙王ニ献スカ
ザルニ五采ヲ以テス趙王大ニ悦ブ

祈穀 漢ノ武帝ニ始ル天子五
穀成熟ノ事ヲ天ニ祈ル

ナ **粉荔枝** 米ノ粉ヲモツテ荔
枝ノカタチヲツクリ

食スル **折七松** 歳ノ始ニ松ノ枝ヲ折
ル男ハセツ女ハニツ

茶トシテ是ヲ吞 **鐘馗** 唐ノ明皇
ベレト薫靴ヲリ

思来リテ明白玉ノ玉笛ヲヌスム
明皇怒ラセ玉ヒ武士ヲ召ント
ヌルニ勿心子一人終南山ノ進士鐘
馗ト名乗リ以前ノ小鬼ヲトラ

ヘテ食ヒ細シケルト御覽アリテ
明皇ノ御夢サメテ翌日御腦
ニ愈ダリ是ヨリシテ後鐘馗カ
像ヲ画キ又人鐘馗ノ像ニナリ

テ正月ニ家々ヲ廻リテ祝フト
ナリ此事唐ニモ久シク言傳アレ
トモ附會ノ説ナリ委シク日本
歳時記ニ論ズ見レ正説ナリ

元日妙術

除年中病 去冬
山椒をほだき置

今朝丑の時より前赤小豆七粒と
右の酒にて吞へし年中病ふし

除邪氣

今日暮木を焼ば年中
の邪氣を除く或は煎湯として

吞もよう

不老法 今日枸杞を
湯に入れてゆあみすれば人として北

澤ありし病を老す 治腹氣
日小便を以て腹氣を洗へば百

瘧疫を辟く 麻の実七粒赤小豆
七粒井の中へつるまは病難を除く

樹木

今日鷄鳴の比火をとり
てして樹木を見るべし此時ハ

いまは虫さすとも腐るる
枝葉のありまらざる所あり是

と取去るべし虫生せざる也 又元
且五更の時早く斧と持て菓

れ木を叩く或は切る斯のどく
べし其年菓實を結ぶし多し

○鷄鳴の比松明を火をとり
木の上下とててせば虫しやうせじ

元日寺社

京 祇園御掛の神事 元朝堂の
火をうけよ奉詣の人ありて一説は火

画像開帳 ○二條道場天神自画
の像開帳 ○仁和寺北野兩所午王

加持 ○比叡山東塔の修正會 但
元日なり四日まはせり

横川 西塔八日迄なり

大坂

天王寺講堂秘密供刻 寶の宝
藏の朝拜刻 太子堂の法

事舞楽 卯の金堂の万石米 酉の六
時堂の重盡 酉の修正音楽 酉の

初春之部

日の定まらば
元日よりちり上

向の季乃りの此はさふ出を
歳旦とさるるありのなり

若餅

三ヶ日の内又ハ初春のつ
まらるるをいふ説ハ

小丸餅と若餅と云小丸字と忌致雑法

破魔弓 **破魔矢** 元辰

ひ小勝負をあらそひむりたり

弓のまゝびるるべし弓は不祥と

中は用也哥あり白虎通云云

天子より弓を射て陽氣を

たどけ万物小達とるとわり

羽子板 胡木の子といひつと

まゝるひなり秋のそとめ蜻蛉

とひ垂れ蚊を食ふのかりその

形をまひて板小のせつき上り並

あつ時蜻蛉のこゝと世間同答よ

毬打 毬 **毬打** 毬

外毬の毬毬の毬毬の毬毬

持毬子毬供毬の毬て毬あ毬な毬い毬物毬へ毬唐毬土毬

黄帝と云人蚩尤といふと亡しめい

外蚩尤の天疫神とさして人民とを

ませ故蚩尤が眼をうつまをへ年乃

初毬き毬ち毬ら毬ち毬う毬と毬う毬つ毬ら毬う毬ら毬う毬の毬本毬朝毬

昔毬の毬年毬始毬上毬つ毬ふ毬と毬し毬と毬あ毬ま毬い毬ら毬い毬

故毬日毬本毬紀毬ふ毬れ毬出毬ら毬り毬万毬葉毬集毬は毬

玉毬き毬ら毬ち毬う毬と毬う毬つ毬ら毬う毬ら毬う毬の毬雑毬法毬秋毬

元辰

雑法

秋出

元辰

雑法

秋出

元辰

雑法

秋出

元辰

雑法

秋出

元辰

雑法

秋出

元辰

雑法

秋出

元辰

雑法

秋出

元辰

雑法

正月日令元日

正卅七

元日小より古例あり 王羲之の書

初月義書小あり 王羲之

日往月來 元正首祚

太簇告辰 微陽始布

盤無不宜 和神養素

詩書初 世間書多し

天筆和合樂地 福皆圓滿

詩長生殿裏春 秋富不若前日月

詩佳辰合月 歡無極萬歲千秋樂未央

詩陽和入大履 梅萼出枝條

詩梅自發南面 香猶到東簾

詩黃金自充夕 朱提忽納朝

詩海內太平日 扶桑安靜時

書初のこ

新古今

斐之

君の代の年の数と白お乃

もぬけすさごとけりきん

非七和や和ちふの低もゆり色友声

あつろよふあふそそ手始 其角

天等々庭と深て和合樂 重頼

狂八十の春と咲て 藤卿

いくも世もよふ任のいゆる初

多ふ八とけ 去年今年

△ゆる年△すしの年△さく年

△千代乃と歌△君がとる

右つぎも元日より年始の心

排花の玄年今ふにけふ初と童

球法々 年の初ふ幼女乃

頃ふ始まるるまやあはれど久

と世より童女のこそあを

びくきくれを懸打り
あつる物なり

御降 元日ノハニテ日
迄の間の雨ニ 三ツ日

五日未ハ門心怒りあり
松の内 正月十音
追々十

春永 永見永陽と云
祝の詞ニ春ハ
日もながくゆるマウ
心といは

非 春永といふマ
祝の詞ニ春ハ
日もながくゆるマウ
心といは

湯殿始 湯殿始
浴す

弓始 弓始
射す

神代抄 神代抄
見始

馬乗初 馬乗初
乗す

着衣始 着衣始
着す

春駒 春駒
駒を頭

年禮 年禮
年立

春駒 駒を頭
禁中白馬節會

年禮 年立
年立

春駒 駒を頭
禁中白馬節會

年禮 年立
年立

春駒 駒を頭
禁中白馬節會

年禮 年立
年立

春駒 駒を頭
禁中白馬節會

年禮 年立
年立

⑧ 弘本てはきまのいんきふく
らふねのいんじけうのいんが貞柳

鳥追 踏哥の豊風がり参河よ
数千町の田圃を持つ長者の

田圃の鳥を追ふはとめむらう
かてこの長者がふ養りて者数

人ありはふよりて長者の事と祝
して年の始ふ諷やう哥さう○せ

千町万町も鳥を追ふべいとさうり
御長者の御内へおとすつたはら

右大臣左大臣関白殿の鳥追の高
官の人の鳥をみよもとせんでいひ

たもとせんでよをせうとさうり
東西の四千町の田

香退のまやえ 大黒舞 志は内か
つる春の川 風鈴軒 民の門か

来て目出度哥とてい舞い噴と
内は其頭を錢と身とせのれと取ら来云

⑨ ちをせきて 諷初 松柳子松
藤とさうり御牙 難子松謡

⑩ 律代の民や腕鼓がう協和如貞
狂作とてかもしテワキかせんさ砂の

ねとすりすう友 万春樂春
おまてつり頼智

鶯轉 梅枝諷小 青柳
△

⑪ 是は皆催馬糸の諷い物の名
催馬糸禁中うさい物の名

⑫ 舟乗初 興舞 舟乗初 船王
祭り

舟乗初小賽とてさかたりとて故
実ありその並べるや上へ一と二

並ぶ二天日和とてさうりかと祝
てさうり左まんな下へさうり方ハ六地

真直めで水上おさうりさうり
とて二と二とと合す中荷多か

らんとて向ふへ三とさうりさうり
より前へ四とさうりさうり合す

祝ふ事さうりや 節 節
え方へさうりさうり様のおさうり

朝節外節親戚宴會とて
節振舞と云ふは往來するに

新春の賀節と祝ふより尤今節
毎に祝ひ祝ふ事年始の限り

とて正月の始めなる
ゆを以て格別な節として正月

の事とて祭りとて花と
いへば櫻の事とするが如し

① 沙をうき系より小鯛焼りの
串ふらぬる春のうき保友

節小袖 ① 沙をうき系より正月さ
うき小そでうき正信

② 夕のこころとてあまのこ
ころも昔んせむは保友衣 正信

椀飯 東鑑に云く今日千葉之
介これを沙汰すといひ

當月武家の節といふなり
① 節振舞ふ招く文をハ漢文ハ徒

松竹交々 詩 松竹
交々 詩 松竹

緋のゆり 沙 年 盆 頂
了 彩 鳥 行 盆

秋 住友 人 名 為 左 風
桐 共 懸 席

① 雲 中 之 鳥 正 午
② 雲 中 之 鳥 正 午

① 光 陰 等 級 秋 風
彩 不 得 辨 秋 風

鉦初 ① 鉦初 ① 鉦初
の風とてまかす寸鹿周

水祝 水 分 去 年 新 不 變 伊
祝ひ 男 以 水 か かる 事 之

これハ永祿の比松永が煙と寵臣が
めをせしよりとすなる ① 相 こと

以 女 房 持 光 贖 初 ① 吹 初
あ い 其 角 贖 初 ① 吹 初

箏 築 簫 彈 初 琴 瑟 三
尺 八 笛 類 味 線 乃 類

舞初 ① 四辻家不祭初あり
正月十七日禁中了

御舞初あり舞初に能初あり
あはれ舞樂のそとをさる

御慶 年始の祝いの言葉
ありあはれよるこいひ

履新慶 初りさかひ
新しきとあむく云

事へあむくつひつらうさうと
あむあり。年始を賀する詞

淑氣 初春の立つ一氣あり
年始の言葉あり

歳旦句の祝 歳旦の字義に
のりこころあり

つねをよむ瑯琊代醉扁ふる出
く旦の字は日出上といひる字

義少歳旦の句は年始賀詞のこと
よむへ一述年の正月中旬七の

氣の物と歳旦と心得る間違
あるべし一か歳旦の句は手き

よめあり忌詞多し火にても
不吉の詞はよむるべし

子日 初子日
△子日遊△小松引
△子日松△初子日

の玉簾。ひうハ子の日野辺は出
て小松といふ遊ひのありしや

入皇六十代朱雀院の頃より初
と云北野紫野へ行幸ありて

小松といふ此日と祝ひてハ事ハ
公度根元といふ各不出る子の日

小松といふ給ふいふハ子は方角
ハ北方ハ北州の千年の壽と云

と云△松も千年の壽あり目出
度との故と引く小松ハ千

年の壽ありくハ行末業あり
る心と云くみ目出度ハの故

あり。玉簾の更ハ決り
委しくあり

○今日泰山府君の祭りの日なり
新古今 俊成

さし波や志望の溪松やふさ
惟が世よひきつ子日ありん

夫木

同

まゝきき松子れ松母さうとて
若とていふ松門の小松を

文治百首 定家

何也松子松子の夕人れ小松を

去のまゝぬを繋りそちをん

夫木 兼待子日 寂蓮

ふと色合ん子れ日の友を頼めも

松いへうさた老しかりたり

家集 社頭子日 清輔

松をいを針のさむろけ子日よ

さう本代子代のなりよんせん

續古 雪中子日 土御門

あゝ若のまゝあへお仲人の小松系

引ひれ松乃をまを口へは

久安百首 隆季

あゝしるまの松子をうけり

志門の丸倉ふまをささうり

引ひれ松乃をまを口へは

あゝしるまの松子をうけり

あゝしるまの松子をうけり

あゝしるまの松子をうけり

あゝしるまの松子をうけり

あゝしるまの松子をうけり

あゝしるまの松子をうけり

あゝしるまの松子をうけり

あゝしるまの松子をうけり

あゝしるまの松子をうけり

あゝしるまの松子をうけり

あゝしるまの松子をうけり

あゝしるまの松子をうけり

あゝしるまの松子をうけり

あゝしるまの松子をうけり

あゝしるまの松子をうけり

あゝしるまの松子をうけり

あゝしるまの松子をうけり

あゝしるまの松子をうけり

あゝしるまの松子をうけり

あゝしるまの松子をうけり

あゝしるまの松子をうけり

あゝしるまの松子をうけり

あゝしるまの松子をうけり

あゝしるまの松子をうけり

あゝしるまの松子をうけり

手折梅花挿頭二月之雪落衣

梅ヲタリテカサニスバ雪ノフルヤウナク

倚松根以摩腰千年之翠瀟

松ノ根ニモテ腰ヲ摩リテ千載ノ翠瀟

倚松根以摩腰千年之翠瀟

松ノ根ニモテ腰ヲ摩リテ千載ノ翠瀟

倚松根以摩腰千年之翠瀟

松ノ根ニモテ腰ヲ摩リテ千載ノ翠瀟

倚松根以摩腰千年之翠瀟

玉簪

たまじき けむりの草小松とて
そて家とてたてしむる

そつゝ俊成卿の口傳小田舎母
かひつゝふととてふ初春子の目
常は松をゆひてこころいとと
掃くしつゝ玉といちちる詞をり

蚕を飼ふ家 子日衣
の祝儀をり 子日衣 服名
△梅の花衣 △鶯衣 △柳の衣 △鶯衣
△鶯袖 △鶯の衣の袖をり

若菜 △千代名 若菜 △磯若菜

△初若菜。七種若菜。十二種の若
菜あり。七種のしつゝとてあつる

昔子の日ふつゝ中世より七日
誹詩別して七日の夏ふより若

菜といふ夏七日の外五十七日
貫之

去日け 若菜揚や白あめ
仲よりとて人のゆつゝん

家集 好忠
さつゝ若菜とてあつる

夫木 雪中若菜 仲正
くつゝのあつゝとてあつる

仲系乃雪いしつゝあつる

夫木 独摘若菜 仲正
旅子あつゝのあつゝとてあつる

御集 朝若菜 後京極摂政
於人々のためとてあつる

万葉 若菜 赤人
あつゝのあつゝとてあつる

夫木 山家若菜 兼盛
あつゝのあつゝとてあつる

千首 水辺若菜 同
あつゝのあつゝとてあつる

詞つゝあつゝ。下巻の道徳のまゝ
あつゝのあつゝとてあつる

あつゝのあつゝとてあつる

あつゝのあつゝとてあつる

七種詞五字對句

同上

官樹千花發

九重中禁啓

階奠七葉新

七日早春還

七種菜

延喜七年より始る上の子日内藏寮内

臘司より禁中小奉るとり或ハ

十二種供とるもわり由公事根

元見へり唐土とて七種の菜

羹と食してよりつ病とのとく

と荆楚歲時記より然共

何の草といふ事と出さ本邦の

七種も諸説まちくなり寛平

年中の哥母へりさふこま

うそこづりさるるすむる

とくしるさるる七葉又一首

せりさるるさるるなびと仏のさ

あはるるさるるさるる七と

△幣の水より早芥の二種通用

△歌ふハ千草といへり△さるる

いそこを本草の佛耳草かり

△さるるハ本草の繁縷さるる俗

かさるるといふ北国といふさるる

といふ○さるるハ詩經に詠する

所の卷耳さるる京といふさるる

のさるるといふさるるさるる

是若菜さるるさるるといふさるる

さるるといふと深秘さるる既ハ

本篇博物笈より委々く解と△

なごさるる和爾雅より土器草とさ

冬より生じて地よりハ單黃

花とさるる△佛の座ハ小兒のい

ぐんげ花さるる唐より碎菜齋と

いふ○あさるる青齋の事かり

○延喜式七日ハ若菜と献せり

る事さるる今とて七日に用

日未上

邪氣を除く 藁火を持って井ぬら
廊の中とて、邪鬼皆走去る

祝詞 新禧休喜事日漸
新社駢拜無勞茲禁

占ひて目出度事を知 二 今日
て有と云々茶ハ龜占入 日 梅日云

二宮大饗 二宮とい東宮中
宮の御事なり

公卿以下二宮よ参りて
拜礼ありて饗ふく 公車 朝
根源

觀の行幸 是ハ天子年始の
ちとて上皇井小

母后の宮へ行幸る事なり公事
根源よ出朝觀の二字ハ礼記有

臨時客 摂政関白の家小大
臣以下の公卿を招

ちとて遊びかへて定まる公務小
らざれ臨時の客と申す源氏
物語ハ「まん」客とあり御ゆ
かど有てさいとて「今」樂器

と用ひてて野曲の人も勢揃
かてうとていつり 年持事所令

梅がえうとてあひささゆる
詞 神とつと縁ひまてある大
はのそで宿のおとひあをと視ふ

告朔 論語ハ朔を廣小告と
す月朔日百官の

行事とあるして天子の獻覽
入るなり當月の政多とあへ今日

或ハ四日とて行るなり
年持事と云ふなりとて安ける

わくふのむつれをむかひんき房
非 音韻のれやひ下の年た長 良

摩那切始 廣攝大隅の兩家
是と行ふ夜ハソコ

商初め 買初賣初家より
三日四日とていふも有

非 高きつ 智のや
しんは極者京北君 京天狗酒

宴 六原愛宕寺門前の強刺あ
つまりて祇園會はくと定む

堂中小太鼓ありこれなると螺
と吹甚とさかーさゆへ天狗さり

りりとふ○東西 大坂 船玉
本願寺松拍子

船持舟玉 近江 鳥つるぎの神事
の神とまる

鳥へ正月二日 三 今日と楮日と守
あつて毎半 日 不成就日○今日

江戸御諷初 たり薬 千療万
老松東北高砂

銀器か入て天子小奉る無名指み
つひて御額并か御取のうへに付

らくとぞ延 京 北野裏白の連
喜式ふ出り 歌○比叡山横

川西塔元 大坂 天満石
三大師會 不動衆

四 今日と年月といふ○開基の福
日節といふ今日と一年の基と開

沸 今日三月供する餅と菜等が
いして喰ふ福沸といふ祝の詞

餅の異名と福生果といふ故りらの粥
と福沸といふ鳥の又七早喰餅菜の如

と福沸といふ又香 菘と菜と物と煮を
と福沸といふ鳥の又七早喰餅菜の如

かえ開 神前灵前かき其外家
わくととさおふ元日より

餅と餅とと鏡餅といふ今日七日
十五日等いして喰ふ開といふま

夏よりまるといふ忌詞故いといふ
非今初向ふ系かきののらと光廣

白髪と香 今日 京 飛鳥井家
白髪と香の香を全の蹴鞠始

難波冷泉の 大坂 天王寺芥田
両家皆同日 坊の修正會

五 今日と午日と手先とらふ榮地
日ある人の農人禮と勤るなり

天氣 雨れは五穀の 叙位 五日
は蚕ふいあし 六日

正月日令四日五日六日 正、四、九

諸臣の年薦を奏し次 **木造始**

弟小位と叙する事あり **萬歳** 五日禁裏(来) 行事之 **萬歳** 千壽万歳

とつたり一條院の御宇大江の定基三河守に任と其民又

舞へて佛教傳來の因縁とのて舞ひひるをそとめとととかり

舞 **非** 和まのちとる方家ホ 聖 狂万歳は後いとも六積れさ

八百八十四文 **猿引** 是れ今日 禁中(采) 舞ひひるをそとめとととかり

漢の画 **大坂** 天王寺太子堂 引え酒樽燦燦石 **京** 東福寺 五百羅

像掛 **六** 今日と **六日** 年越 今日とととと 日馬日と

京 高草寺 浅草寺 方丈鐵法 **江戸** 修正會

近江 山王三宮七 此日御小登り 神事能 日遠く四方と美

陰陽の氣と鎮ふ事を得て年中の煩惱と除くの術也と萬華谷

とつ木小出さう李亮とつ木小出さう **命駕** 外西山富目眺原晴と

作さるも○七月八日と云又靈辰此事なりとつ木小出さう

とつ木小出さうとつ木小出さうとつ木小出さうとつ木小出さう

亡日寺出行と忌まうれも頼朝出陣と諸人往亡日ある候りて

とつ木小出さうとつ木小出さうとつ木小出さうとつ木小出さう

天氣 風雨あま **白馬節** 災ひあり

會 七日白馬と見れ氣と 柵さつり禁中して七日白

馬北足引さる馬の陽の獸青さ春の色あり故に春の始と御覽ある

あり白き月の青きあて見ゆる物
夫也人の馬節會といふや

詞百歳の意下りえ此をよりの
のづなりをさる。松は赤を。や井
はまもつて孫。若菜。鴨。白を
引く夜いそくも月毛。う那。重勝

御弓の奏 七日の節會小兵部
省より奉る天竺の

多羅葉の其長さ七尺五寸ありは
御弓もそれいふかどりて七尺五寸

るるめへこれを御して申さる
○二説御靴の奏といふ心さもさう

御修法 紫宸殿まで勤る七日
より十四日迄東寺御

室より修行。古昔に此所小真言院
有て修と今に寺を紀也暫く南

殿で行い 七日正月 本朝は今日
なまふと 五節乃

ひのけ 正月は少陽の月之七は少陽の
数に今日少陽の月也少陽日故

上の朝庭より下方民のつらさを宴會
とると。若菜のあつ物と喰てその日

の遺風とるに七草若菜のいへ詩
哥連非の四十二日若菜の外あり

△七草雜といひて昨晚若菜と板の
せて日本の鳥と唐土の鳥と渡らぬを

ふ七草をむむいひて雜とて 鬼車とさう物
鳥は爲公家いふ人いふ也とて此鳥とく人
はさうの心鬼車鳥の夏ハ事文類聚かえさう

△福に 若菜のいへ七草のいへ七草のいへ
也△をを摘△齊高摘△若菜摘。右草

るるの類つむくつハ正月七日あり
あぐ杯のかり興の草木の部を委一

詩 人日詞 廬全

春度春帰無恨春 幾年もくモ 今
朝方始覚成人 朝日ヨリオモハ六

人日 徒今克己 應猶及 今日ヨリ人
トス 願與花俱自新 梅ノ蕾キカ如ク

願與花俱自新 梅ノ蕾キカ如ク
心ヲ新メントツ

○人日 金縷人 金糸を
以テ人

故事 金縷人 以テ人

形ヲ作リテ是新年舊キヲ
改ノ新キニ従フノ意ニコレニヨリテ
人日トストアタヒトラト位元日ヨリ
歳時記ニ出 貼入於帳 六日ニテ

ハ六畜ノ日ナレトモ今日ニ至テハ始
メテ人ノ日トナルニハ帳ニ人形ヲ
画テ貼ルナリ元日ニ雞ヲ **除病**
画テ門戸ニ貼ト同意也新キ

布の囊フクロ小赤小豆盛マて井の
中ナカ置マ三日ミめ小取出シ男ハ
七粒女ハ十四粒ツて登ハ
今年中無病ナナリ **京** 加茂の
神事

京 嵯峨サカ堂ドウ 大和ヤマト 築キ川カハの
念佛始キ十六日 神事カミ芳野
八 今日ケと穀日コと又
日 遠トキキ出行シをシハ **天氣** 今日
雨アメふ

色イロババ昔コトも雨アメふる○月ツキ雲クモ小コ聚ル
りリハハ春ハル雨アメ多シ○夜ヨ參マ星ホシ月ツキの
西ニシ小コ水ミヅババ洪水ツツミとト起キ
○今イマ雨アメふル水ミヅ田タはハ **御齋會**

太極殿タイキウテンにて今日ケより十四日迄最勝
王オウ經キウと講コウでテ是コトて朝アサ家カと祈イノと奉ホウ
申マウして太極殿タイキウテン今イマハハけケはハ震シ震シ殿テンか
て行イぢヂふフとト人ヒト ○年トシ持テ事コト哥カ合ガ 和ワの

法ホウのノ意イのノへテ法ホウ若ニ々々ハハ子シ代ダイをシ行イハハの
ママ々々人ヒト世セはハるルふフのノさサはハれレめメるル
いイハハるル世セのノ考カウ **真言院御修**
けケむムりリハハ為ニ家カ

法 今日ケより七日の間行イハハるル今年金
剛コウ界カイをシハハ明メイ年ネン胎タイ藏ゾウ界カイハハ
後ノチ七日の御修ミヨシウ
法ホウとトハハ此コト事コトをシハハ **大元帥の法**

治部チブ省シヨウかカて七日 **女叙位** 女メの位イ
これコトと行イハハるル **女叙位** 階イと叙シ
やヤるル事コトをシハハるル叙シ位イとト位イとト定サまマるル
○年トシ持テ事コト哥カ合ガ 讀ヨミ人ヒト不フ知チ

春ハル小コあアのノ山ヤマまマまマのノ山ヤマをシハハるル
まマのノ山ヤマまマまマのノ山ヤマをシハハるル
女王賜祿 参議等の官人衆
明門の内帷の座

て女王小祿を賜ふ公事の時女王
祿の女は字とよゆと王祿と計よ

京 空也堂鉢 摂津 △築の面舟
天富八日
寅刻

昨七日より 薬師 月毎了
参詣多し 八日と十二

日と縁日といふ諸方
も参詣あり

九日 今日天氣 晴 まのまの
九日又ハ吉日
晴ハ海 吉書奏 と多くびて行
く実の

る大臣参りて諸国の守釣と給人
て不勸の舎と開くべき由と奏す

る之俗ふつふつ 摂津 西宮民家今日
坊と云出合
居籠といふ

十日 天氣 月ハ曇れハ春中早と
併早くきわれハ早せと

〇午の三刻風とけき 帳釘
ぐる風さけきハ雨ふ

帳書 今日明日とてくろて商
帳書 賣人の家ふへくへて年

中ハ賣物買物を記し置く帳
面とどけりる 排帳とらや若時

とハ 夷祭 今日夷も排帳
西宮今宮代や名不

小判も春は 狂も人の勢み
もやまらん戒もありの筈とげ

ゆ 常陸帯の神事 常陸
貞研

鹿島明神の祭に日女の懸想人も
もあつ時その男の文の灰布の

帯ふりきあつて神前小置ふ其
内う交する帯と見て女のうけ

帯のまのけりてするから其どい
はのの男と親くする事と

無名扱小見へさう 排帳とら
ありぬ風も神さつ 東怒

十二 不成 鬼宿大音とて事ハ正月の
日就日 始吉の字上するハ今日吉

御具足鏡 具足鏡開 元日ハ具
足ふそるハと雑

煮とあて喰ふ之〇江戸御殿中井
小諸大名の屋形も同断かりその
かゝり廿日入大猷院殿君の御月忌
るゝゆ兼應壬辰の年より今日か
かりゝる之**非**維威の海 **縣**召
むもかり七杯のま木冠

除目 今日より十日まで三日日行
りてアガタとい郡国と申

り諸国の受領を召て官禄と玉
るゝわ申必執筆の大臣参り
て御殿の廣成小て行まらり **前**年
中行事哥合やとまらるゝ悉くせむらわ
かこりやぐらにわへふ名こそや
ゆは新中納言 **非**わつけし對の

事始 今日何事はらう
仕初る帳の表書
るゝ **京** 柳原の榊小神酒と供す
す **京** 今日と廿一日毎月なら

二十 今日と花朝 **天氣** 今日日曇り
り節とら **天氣** 今日日曇り
るゝ

登り晴き八月の中雨〇月小ぢ
れ飛虫の類多く死と〇今日
一日ひよりされの百葉よく実のる
今日と十六日と雨をまば年中雨多

解齊 御粥 日の御座の大床
立て供す御粥赤きかりけ小和
布の御汁物をそとより三口食ふて
御箸と **薬師** 毎月今日と會
るゝ云

三十 **天氣** 今日快晴なれば
毎月十日和 **大坂** 弓。御
結鎮も云弓矢の大札へ
神居皇居三輪退治の時より始
する天下木平の御祈禱なり

南都 兵也
心経會
今日と俗よ〇んうと〇ん
〇かめの子れ羊天一天上 **削花**
柳の枝とけつうけて門戸小ぢ
柳の陽木小て祝むとまらるゝ
ごふも用 **踏歌** 殿上地下の輩
る木より **踏歌** 然るべき御殿

四十 今日と俗よ〇んうと〇ん
〇かめの子れ羊天一天上 **削花**

柳の枝とけつうけて門戸小ぢ
柳の陽木小て祝むとまらるゝ
ごふも用 **踏歌** 殿上地下の輩
る木より **踏歌** 然るべき御殿

とめぐる催馬樂とて舞ひ
かゝる事なり天元六年より始
りて唐の世小長安の踏歌
せし事潜確類書小出あり
我朝は持統帝の時漢人來朝
して踏哥と奏と此時萬春樂
舞小今の万歳この余風なり
これを男踏哥といふ十四日の夜より
女踏哥は十六日の夜よりあり
そのとよめありとも又踏哥
の節會ともいふひさし京中男
女の声々あつて能くうらやま者
とてははて幸始の祝詞とほ
らうて舞を舞せとせと侍に
ゆゑ或時ハ和哥とて又詩
とてふふぬめしあり源氏物語
小竹川をうらやまし出さる高市
子小綿の花を作る是をうらやまの
まことといふ又めろこ小朝士の文
とてははて幸始の祝詞とほ
らうて舞を舞せとせと侍に

をさうしめると事文類聚小有
るなりそまの十五日の夜と云
ふ
⑤ 幸中行事哥合 貞世
そのその声さるとをさし
うらやまのまのめ月夜母
⑥ といふを和歌とてははて幸始の祝詞とほ
らうて舞を舞せとせと侍に

頭排綿 綿の作は花を冠の額
かつてふとていふあり

踏歌詞 唐張説

花萼樓前雨露新長安城裏太
平人 今夜イロクノツクリモノアリ都
人民皆太平ノ御代ニホコル
龍御火樹千燈艶雞踏蓮花萬
樹春 梅蓮ナトノ造リ花ノ燈籠
カザリニ竜ヤ雞ナドヲ見車
ニ造ルニキハシキ見物ナルツ

御齊會内論議 南殿おて
御齊會

の結願を行ひ問者講師ふと
御前おて論議とて内論議と

正月一日 今十四日十五日 正ノ五十五

申す 十四日羊越 繩引 繩引

ゆゑ大つると引合ふて勝負おつひて其年の吉凶をあらわす事なり

土龍打 土龍打 をくちりくちり 京 北野

午王が持結願正月朔日 行々今日至行法終 江戸 谷

感應寺 大坂△生身供 天王寺 五日迄 今日迄

十五日 今且俗 天氣 今日雨ふまけ 八月十五日小

又雨くつ○天暗まば 測年之 葉大小熟じらるり

豊凶 今夕月正中す時一丈 測る七尺されハ大豊年六尺ハ豊

年九尺一丈水とまらる三尺四尺五尺ハ豊

養生 今夕夫婦の交

命短し 三毬打 左義 正月 長お打

出でてやきよす 毬打玉ハ三角

あて天地人表一やさ上るハ陽とまらる○今の世民間ハ正月の如

ざり松竹をあらわハの類とやく是とらんぐり之○唐ハ元日ハ竹とやく

竹のやう音おて陰氣をうい妖邪の

△爆竹 とくちりくちり 又竹とやく

△三毬打 唐土の多れ 貞徳

狂 お教ふのかりて 貞柳

詩 爆竹詞 ハチノクハ竹ヲホシ 黎淳

自憐結束小身材 一點芳心未

肯成アハレナルハ材木ナレドモ心ニ時芳バシテハサトヤカレヌツ

節到來セツク多クカク燭發萬人頭上一聲トウクセ

雷ライ時來リテ火ニカ、リテ松竹ノ鳴ル音雷ノ如ク諸人ノ頭ニヒツク

御薪ミコノカ百官悉く薪と奉りて官内省亦おさめくありと云

赤小豆粥祝アカアヅメ紅調粥ベニアヅメ粥アヅメ紅調粥ベニアヅメ粥アヅメ

清火納言枕草紙シヨウカノナノリ十五日ハリイカ少のせくまると書しも此事カ

粥木アヅメ粥杖アヅメ十五日ハリイカ昔ハ禁中てもきたむいへ

平岡の御粥ヘラノミコノカ河内国恩知平母の神前と粥を煮

七月十五日と中元ト十月十五日と下元と久〇唐ぬハ今夕燈籠と

多々とりし甚ゆなりし事本朝中元の夜は是と花燈夕云

大樹銀花合星橋鐵鎖開燈ノカサリ善盡シ美盡シテ種

暗塵隨馬去明月逐人來見物

行歌盡落梅カクカ衣服皆美兼ナルカミチク落梅ノ曲ヲ

王漏莫相催ミヤノモ金吾不禁夜金吾ハ御門ヲ守ル官

上元故事トド連燈不夜トド唐土ハ今夜元宵元夜

百枝燈ヒトク

ナド、云テ燈ヲ点シ賑ハシヒトク

キト本朝ノ中元ノ夜ノ如シヒトク

唐ノ世ニ韓国夫人百枝燈樹ヲ燃セン故事之天竺遺事ニ見タリ

士女遊

唐ノ世ニハ今夜宮女ノ遊行ヲ許ス御襪ノ

燈火白登ノ如シ士女一人モ夜行セスト云フナク車馬路ニ塞カルト

靈異小説

傳柑

今日唐ノ世ハ二出タリ 貴戚黄柑ヲ

贈ルヲアリコレヲ

虹橋ヲ架

怪

録ニ云ク唐ノ開元ノコロ正月十五日帝葉仙師ニ宣ク四海ノ内何

レノ所カ極メテ麗シカラント仙師答ヘテ廣陵ニ踰ルヲアラント帝マ

タ柯ノ術有テコレヲ見シヤトアリシ時俄ニ殿前ニ虹ノ橋アラハル

ヤガテ大真并ニ高力士黄香綽樂官数人ヲ從ヘ歩シテ橋ヲワ

タリテ行幸アリ俄頃シテ廣陵ニ至リ玉フトアリ

花燈文

唐ニハ今夕燈籠ヲ多クトモシ舍利ヲ拜ス也

○至道元年燈夕太宗御樓臺ヲ燈籠ヲ會利カクテ花ノ花杜吾

京

加茂左義長並ニ神事○差我奴迦開帳ハ八幡厄神祭十五日

伊勢

△獅子頭神事 山田度會郡ノ獅子頭と神体と久十四日十七日追祭

駿河

△御徳祭 三保大明神是ニ三穂津媛命ニ祭ル十四日ヨリ十六日迄ナリ

養生

今日大酒とハキキム又夫婦の交すハム

天氣

今日西南の風と入門風と豊年のおうり

東南の風も西北の風も早とつらさく暗天も早も

女踏歌

十四日男踏歌の如ク京中ハ男女

声よく哥とてふを免されて羊始の祝詞をつらあるハ和

正月日令十六日 正月十八

哥ううの詩をうへり 走

百病 既小本篇博物筌 西京雜

記小云く執金吾の宮中の者の

夜行と禁する官へ今日勅して

前後各一日間禁とゆへらる

これを故夜といふとあまを見

時ハ唐土も此事有るべし

非殺令それいふをたれが

狂殺入る筈は月をれや

ぞら二とあり 京 永觀堂六般

頼朝卿の世ふ始る 加茂神事

○北山石不動衆 千本焰魔堂

差我焰魔堂六齋念佛 江戸

坂 天王寺射場の弓をめ 同

所金堂大般若轉讀 佳吉

甘菜の御供神 明神々詠

櫻 伊豫の国道後の左の方山

越村といふ所の了恩寺山小有

て毎年正月十六日小花咲くゆへ

名つくじく此山は花と愛じ

及んで春咲く花も心せよ

ひ八旬かあまれ此春花咲頃

逢ひくくとかちたれば花

それよりして年毎小正月

十六日小花さくとあり

七十 天氣 今日と秋收の日と

晴天をいへ秋に至て五穀

正月一日令十七日十九日正五十九

豐作也大雨あり秋洪水あり
曇る秋作不宜昼の暗る害也

京 禁裡伶人の舞御覽并に
鶴庵丁大隅高橋隔年小

大坂 天王寺東照宮御
法樂○同所金堂

本尊秘法の江戸 上野御泰詣
御盤宮御弓 御盤束にて

十日今日と落 養生 今日怒り
日灯日とよ 賭

弓 天子弓場殿小て弓と
あふるり其負るる方小の罰

酒と賜い勝る方よの舞樂と
奏す大く近衛の官領る事

とく大將射手小饗と賜小
ととかつりあふるりつかり

年中行事哥合 よみ人あは
棒弓射ひの司儀ははきく

かたりあふるりそ礼文とふ
未奉るを棒はさるりつきて

非 山崎の心小まゆとせり頭仲
まきり射る弓や二人張り友静

京 禁裡の左義長○山崎室寺
鬼○壬生六社大明神祭○

大坂 天王寺太子堂踏哥節會
○新清水寺觀音供

十不成 八幡忌神祭 今日まで
日就日 京 参詣蘇民將來札守りと

△吉田社清祓 厄神とて奉り神
と立神祇官夜亥の刻小修行せし

法然上人御忌 今日此五日迄
て修行せし

非 人の世乃らるるを其角
後處に法その一筆及ふ松竹

九秋收日 天気 晴天さる百菓
日といふ 熟す

女鏡臺祝 昔小祝ふ事廿日と
と字音同じき故世祝と

習者、人の鏡臺小供、餅と今日も喰入まきり 今日

骨正月と云ふ京大坂杯も今日、菰魚の骨は大豆酒のついで食ふ

七日團子 今日だんご喰ふ地名、づく。唐土江東と云取

小今日紅の糸はく奠飩をつまき、屋根の上はたきとこれと天穿と

名はつらなり。拾遺記に見えり、り北日ふだんご喰らふも是

ときまゝ 江戸 諸大名將表、小て上野茶詣

下交 嚴島祭 安藝の國。市杵嶋の神、云地景の美を故名づく

北日 天氣 風雨と主る日之風なけき、雨ち若晴は異日風雨

内宴 仁壽殿と行わる文人、題を賜り詩と作と御

前と講せらるる之、年行事奇合、るる儀休の息代その如くや

花をみゆれの 京 伊勢祭主柳原、の柳小御酒と

供せらるる 〇本國 江戸 高輪毘沙、門堂富突

二日 京 太泰聖徳堂法事 〇大原野、春日社祭 〇西園灰形祭

大坂 天王寺太子堂 月次の法事 兼音 三日 京

東山善正寺 川島祭の松尾、秋迎の開帳 四日 京 愛宕茶次

江戸 増上寺上坐法問 諸大名、泰詣 〇愛宕山参り

廿五日 養生 今日席 天氣 月小童有、事とし 〇梅小虫多

京 北野法樂 御忌 法然上人、連哥 毎月 〇御忌日 〇知恩院北

明寺黒谷智因寺 百返、浄花寺四ヶの本寺に於て、法事あり十九日、日まではてけり

京北野 江戸湯島 六日 京 西田下津、大坂天満 別と 〇林神事能

正月一日令世日ヨリ晦日ニテ 正ノ六十一

不成 京 ○泉涌寺舍利會

就日 京 ○西の田牛ヶ瀬祭

江戸 目黒不動 大坂 北野石不動

初不動 今日縁日ゆへ諸國不動参詣多し

晦日 天氣 今日風雨あり 清水寺の連歌

白髪と除く 今日井華水と少く

月令 此部ハ日の定まらざる正月の事ニハ初春の元日次出也

外記政始 外記ハ恒例臨時

の政事と執行ハ官よりハ正月の當年の政を行ハ始る義あり

店卸 惟祝いと同類(非)一奉

傀儡師 傀儡ハるつとよし 雛舎の留女の遊女

どうひたる流々つとよ人形とまりて其々つの留女の身がりとるやう又でこももいふ 西の宮路も

詞 七こまハ一山猫つとよ 志むの作

非箱小鉢て表せぬ箱や傀儡師 汶上

夷廻 傀儡師の類して初春小夷の姿とまひ目出度とを委

初芝居 昔ハ芝の上にて見物しう故をわくと名づく

三節 正月元日七日十五日 右と三節といふあり

歳旦開 宗匠家ハ正月吉日とあくと門人より

よみきくろ歳旦の句をあつめ席とのりて句の次第と定む

正五九月説 本邦専此三月慶賀の事とせ

或ハ親族相識宴會と云々唐
かてハ此三月官小登らど萬の
事にも用ひどと五雜組小見
えり清波雜志小曰く佛

法小此三月と清素月と
名附て殺生とかくる云々

正月衣服 上つるふりぬ衣
服小かたうて定む

櫻衣 表白う裏赤色
柳衣 表か裏赤色

上つるふりぬ正月右のいろとや
た多ハ正月の氣小應する色ハ

當月綿入を着るとして正とす
袴ハ柳色あり是元素袍の製

女衣服 上着地黒ち下着白
地紅下着ハ白

むくく浅黄の小袖と着か
こして間着上着皆り裏は

ころも 初春のは松竹の繪とは

時令 此部ハ初春の時候
小かこり事と出と

初春 春立日より三五日のお
いそひハ早春と同心こ

梅や咲花のおとらんふ代の着

兼久百首 初春日 忠房
かゝ衣はさくらさくらとは

日のうららかにはあけ

万葉詠鳥
あるびさきまきわじ我門の

柳のうららかにはあけ

建保百首 家隆
おもとけまよひあへは

續古今 初春霞 為家
深みりや霞の夜は乃は

草庵 初春鶯 頼阿
まことふたつとけは

雪の去りけり春の初れ竹の
いと明きまはやくしらん

柏玉 初春海 道徳院

波風孤きうらみちめて四ツの海の
寂しく候なりまやたつらん

詞 雪を履きのとけさみどり候る

日 履む長閑 履ま神ふ 春さえ

さぬさくろふ 雨のしづかとみ

草木 風のどろろる 春の神風 星

りてとるる 花は元日の花は四方珠

くはゆ 煙民のぬきと候ふおけの

をうり 履そふ 砂とけ初る 曉接

雲うさむ 淺の声 春とける 公声

れるの春と告る 朝天此戸の咽て

のとけさ お日影履む 年改玉候年

年立ゆふ 春のさくまはまをまら

いとよ春とつる 春のさくまはまを

久と 春あけの春まはたて下 筑

わよの初ま 春いとけたり 春ま立

りん 春の春る 山雪おとむ 風のど

ろる 雪の初日の履む 海辺波の

む 風のどろろる 磯ふくとむ 遠行

履む 波風のどろろる 雪の初日乃

むとむ 初永とむ 水辺氷とくか

氷のひまは打ある 浪さくの初む

あやむ 野下りゆる春 春開ふ

とむ 春このめまらる 風あけら

打履つとむ 松門の松 一はのさ

梅花とけける 雪のうらみより春

咲初る 春とら行 異竹の初む

よ明きいとけりる 竹の葉はさよ

さをえする 春色 草は初る 下

めふむ 春開ふとむ 氷砂とるる

春とそ初る 春の初ま 雪まは

ある 春風はくる 春はく物る 春對

さくはらる 春今初より 春 世

流さる代のも 流代のも 林林

代もいと春く 神代はくむ

とむ 子 履 春まらむ 春まら

春まら 履の春まら 春の

りろ人。神依つて縁て行く人の心
のくるる。佐穂姫（神）神姫の屋敷に
あそんで遊ゆらふ春の来ぬり
都々この春。九重の雲。花の都の
神を。垣かきねのまじえ神を。常
にんあふさく久くと天の雲。天
の戸。雲井。よの奈の路。あふ
らうとまの雲。

狂 山依のおひなをよめとさく時
門出とたけけあそび云 信徳

○初春早春の題は立春の哥よ
みさるる。ゆけとつるも立春の
題は初春の哥に詠なり。立春
とつる春の節一日又ゆさるる

早春

萬葉

おあふらふ見る柳

雪のさめてかぐくまの雲を
拾玉 雪中早春 慈鎮

附 うれはくまの雲の雲こそ
雪のさめてかぐくまの雲を

艸庵 早春水

頌阿

山川のあはれを波さく
まこまきり 水あはるる

夫木 曉神祇 家隆

神よの心月れまおさえて
とつれらるる雲をさく

同 名所早春 如願

相坂やうら見もあはれ枝に雲に
まこまきり 水あはるる

宝治哥合 早春霞 信実

初雲をさくまのあはれ雲の
まこまきり 水あはるる

詞 霞ふらふ。霞みらう。雲をけ
る。雲げふらふ。霞をさく

風さる。春来ても。春の来るは
流るるを

非 雲のゆきさく柳は雲其角

狂 あふらふの春をさく

水のはれ秋のいけそあ 歌口

物外山川近 風光新柳報

春初景色新 宴賞百花催

早春之作 暢諸

獻歲春猶殘 年アチヌレド 園林

沫盡開 百花ヲ催 雪和

新雨落風帶 舊寒來 雪ハ雨ニ

識早梅 飯雁早梅ニテ春 生涯知

幾日更被二年催 ル世ニ年ノ

老衰ヲモヨフスナリ

餘寒 春ふるりてさむらふ

非 雪ふるりてさむらふ

室治百首 入道大政大臣

貞應百首 為家

柏玉 餘寒雪 後柏原院

玉吟 溪餘寒 家隆

千載 餘寒月 為尹

詞 春をくさるる酒を茶と

ぬ 春の終る氷あり

ぬ 春の終る氷あり

ぬ 春の終る氷あり

ぬ 春の終る氷あり

ぬ 春の終る氷あり

ぬ 春の終る氷あり

ぬ 春の終る氷あり

ぬ 春の終る氷あり

ぬ 春の終る氷あり

ぬ 春の終る氷あり

ぬ 春の終る氷あり

ぬ 春の終る氷あり

ぬ 春の終る氷あり

ぬ 春の終る氷あり

正月時令餘寒

正月十八

庭もあけぬが火庭もあけぬが火 雪霽梅先發雪霽梅先發 山河難度山河難度 春寒柳暗催雨春寒柳暗催雨 雲未和春雲未和春 余寒二三粒余寒二三粒 何報春何報春 石門斜日到林丘石門斜日到林丘 疲馬山中愁日晚疲馬山中愁日晚 孤舟江上畏春寒孤舟江上畏春寒 春風寒春風寒

詩餘寒五字對句

同上

雪霽梅先發雪霽梅先發 山河難度山河難度 春寒柳暗催雨春寒柳暗催雨 雲未和春雲未和春 余寒二三粒余寒二三粒 何報春何報春

春寒柳暗催雨春寒柳暗催雨 雲未和春雲未和春 余寒二三粒余寒二三粒 何報春何報春

雲未和春雲未和春 余寒二三粒余寒二三粒 何報春何報春

余寒二三粒余寒二三粒 何報春何報春

何報春何報春

石門斜日到林丘石門斜日到林丘 疲馬山中愁日晚疲馬山中愁日晚 孤舟江上畏春寒孤舟江上畏春寒 春風寒春風寒

疲馬山中愁日晚疲馬山中愁日晚 孤舟江上畏春寒孤舟江上畏春寒 春風寒春風寒

孤舟江上畏春寒孤舟江上畏春寒 春風寒春風寒

詩餘寒詞

張起

画閣餘寒在新年画閣餘寒在新年 舊舊

燕歸燕歸 寒寒 夕夕 春春 ノノ ケケ シシ キキ ナナ

ケレドモ二月ノ十カバニ至レバ燕ケレドモ二月ノ十カバニ至レバ燕

ノ飛ビキタルコロナレリノ飛ビキタルコロナレリ

梅花猶帶雪未得試春梅花猶帶雪未得試春

衣衣 春半ニ至レトモ雪イニク衣 春半ニ至レトモ雪イニク

消ヘズ冬ノカサ子ギノマ消ヘズ冬ノカサ子ギノマ

ニテイニダ春ノ衣ニテイニダ春ノ衣

服ヲキテモ見ヌ也服ヲキテモ見ヌ也

狀餘寒之文狀餘寒之文 漢起尺牘漢起尺牘

項日項日 倍倍 春春 寒寒

起居起居 如何如何

正月時令餘寒 正季九

衆作式候 山く之

世嶺

雪未不消 一の毛象

積雪 須弄翫

冬遠 象仕のく 深

麩 藻ノ

吟々 冬之く 冬

新賦 了らん 請示ニセ

及存存い

不候

尺牘 秘華七書藝と記と

頃日 ①多日 ②春寒 ③歷春猶寒 ④新候

起居 ①貴體盛壯 ②平安 ③無事 ④無恙 ⑤千嶺

積雪 ①山嶺白雪 ②窓前雪景 ③雪酒露 ④残雪皎々 ⑤弄翫

想像 ①退 ②麗藻新賦 ③泠翰吟 ④想 ⑤眷々 ⑥新詩龍劍

請示 ①擲示 ②曲詩 ③不候 ④野生 ⑤請馬 ⑥投擲 ⑦小子

狀 餘寒之文返事 尺牘之漢文

如々 今去未 和氣

若諭 雨雪未散

山林閑寂 詩人感興

存望中 有詩料 而

耻無著述 他日

得暖 御問焉

尺書替並ニ
上中下ラ記
若論 蒙無余
教示 兼告

雨雪未散 東雲未暗 水雪
御殘 餘寒長在 幽林

遂深山 閑寂 寂寥
閑事 詩人 古人
古調

感興 吟趣 存筆
直若見 詩料
興 幽情

無著述 他日 異日 論日
向來 逐節

得暖 假暉 往問
叩謝 問尋
往訪

○年内そも立春の節より
ハ餘寒とつべし正月元日と
ぎいも立春の節より前より
餘寒とつべし。今春
寒氣つよくあつてつべし
○二月たりともいづれハ餘寒と
つべし。能譜ハ餘寒といハ正
月の季多し。歌ハ春あり

春雪 △あは雪つづきも春ふ
る雪とつづき

△残る雪 春雪と同一事あれども
拾貴 佛本人曆

梅の心それともをひさうこの
あまなる雪のふてふまは

散木 山家春雪 俊頼
ふりつる雪のつらりと

万葉 今さらけをよめもあつたの
りゆまじとあははとのと

建保百首 春雪 定家
ほろの今もあつてはた山

新古今 二月雪落衣 康資母
梅り次風もよそや吹つらん

うてまらる雪の神々しく

新拾遺 野春雪 覺譽
好色りよそよとあつては枯木

詞 春の雪のあつては
あまなる雪のつらりと

のちをみるかきつて 正月 雪 小松

さる さる さる さる さる

狂 狂 狂 狂 狂

詩 春雪五字對句 同上

春雪盛山淺 海暗雲無葉

夕風輕地寒 山春雪有花

宮室雪花齊 紫閣春雪關

関河春色到青門 疊雪輕

前庭花少春空度 帶雪妍

後嶺雪深月更寒 雪不寒

詩 春雪七字對句 詩 礎

詩 礎

詩 礎

詩 礎

詩 礎

詩 礎

詩 礎

詩 礎

詩 礎

詩 礎

詩 礎

詩 礎

詩 礎

詩 礎

詩 礎

詩 礎

詩 礎

詩 礎

詩 礎

詩 礎

詩 礎

詩 礎

詩 礎

詩 礎

詩 礎

詩 礎

新古今

前参議教長

ワカ格神とて又ある春日の
とよ火代への名乃む消

草菴木未だ花と見よとやほ
らん春に消れをたつ雪頃所

詞名るおけれめ。も消る。雪の
よま。名さる。のころ名

非名あや寺とて谷とて幹

狂心男乃て目ねれまじくか
くくもある名女之邪貞徳

詩雪解五字對句

同上

送寒餘雪盡 寒雪多秀水

迎歲早梅新 碧洲盡清流

詩雪解七字對句

詩礎

湘潭雲盡暮山出 水乱流

巴蜀雪消春水来 山更春

雪類附

雪の山よりくま
とらふ正月の比雪

乃あふ山の麓と通らば高根の
山下の様子と尋ね合せ油断を

く通るべしとてて峯高
根の雪解上より雪をまきと山

の肥峯より解落る雪水をこ
ひ山の肌と雪とをまき切てか

時へ裾へまたりたり冬より積
たる雪をれば磐石の如くま

それふうくく死せる事多し雪
さざれくまハ瞬目の間小落る

北陸越後あるひハ越前近江の
境小甚しづくまても雪国高山

の所母てハ心 春氷 春小つる
得て歩行へ 氷くると云

新古今

藤原秀能

夕月夜改らるるに新波江の
声れりるなるあはるるあはるる

詞 氷のくさくさ小川 爲氷。ささく
水の白玉。ぢぢける。春風。ささくささく

詩 春水七字對句 詩礎

引水 忽驚氷滿澗 水重文

回田 空見石和雲 引溪長

殘氷 春ふきりどけつさる氷
との御傘と云書ふのうら水薄
氷冬くさ

氷解 建仁哥合 家隆

水とくまの山風ふれぬし
雲招ととむたさのうらさ
詞 氷さる。わてとくさ。さるの
ひま。わさる。さる。さる。春風。さる
初日ける。初吹あさる。河あはる。
風はさくは。ささる。ささる。

非氷 氷を破る。破る。破る。破る。
連 氷の破る。破る。破る。破る。

鳥飛 林覺曙 風兼殘雪起
アラオトシテ ハレオホハカク カセワエテハサヒヒツオヨル
アケカケヨリ トリトフ

魚躍 水知春 河帶斷水流
コホリ。アケアウラマール

三代樂 回風入律 水初綠
イミヘヨリウタハハシカス

四溟歌 駐水成文 水知春
イミヘヨリウタハハシカス

詩 氷解 詞 儲光義

浴水 春氷開 洛城春樹綠 春ノ
樹林モ緑ナル洛 朝音大道上落
陽ノ好景色

花乱馬 足 落花踏
カサ 遊行スル

山笑 初春の山の姿
春の山ハ草木もささる

詩 春山 終治如笑

春山 終治如笑

春山 終治如笑

正月「晴令山笑日待月待」正七十五

山の草木もまがし流口をへて山の姿もまがし笑ふやうなる物を受

日待月待 此三夜共六夜毎月此事とす人も秘

と別して此月祭つて依らざる事を天地月日と祭つてあつて天子

の行つてせぬ事て常人の祭ハ僭踰の罪甚し天子ハ天地

すつて諸侯ハ社稷と祭り大夫ハ五祀と祭つてつて況士庶人と

教を恐る事ハ非礼の祭りをあす人の福あきて禍あり若木

邦の礼をたてて祭つて歌とる人ハ沐浴齋戒して朔日は朝日

とすい十五日月と拜せハ理ふおして害をくく供物等用

ゆる事かた江戸にては廿三日廿六日高輪鉄炮洲にて諸人群集

して月と拜て是俗人の是非の君子是ハ不吉

草木 正月草木類此大なるつて三月の季つては不吉なる

松の花 奥名黄花 若翠 松

△みどり立右つてまも春あり若とつて以黄なる月のあり是て松の花

花つて〇一説は松の花ハ百年一度さく月出度りのともつて

連雲は花を采にうぬ松乃を連雲の松の雄松をささき異貴

狂常葉なる松のみよりも春之の今下りの葉子れあらひ 正継

哥草庵 頓阿

若くはまのまをさるる若かたとまをさるるのまをさるる

新拾 春松久緑 推家

葉子代のみどりやそへて松生乃松とまをさるるゆきさほりては

新古 松有春色 太政大臣をへてまをさるるまのまをさるる松母を子代乃まをさるる

玉吟 松色添春 家隆

万代も終にのみらぬ松乃松
色ハの向一のまゆるをて

同 春松契齋 後鳥羽院

文のじ神河乃山の松れら
我達のまもまをかり

新續古 庭松春久 左大臣

庭の面小本ちたの松の
来一かまのまをそえらん

詩 採松葉 姚合

擬服松華無所學 嵩陽道士

忽相教 松ノミトリヲ服食セシト思ヘ
其法ヲ誰ニ學ハント業

世ニ山中ニヌク道士ニツト出アヒ其
法ヲ思ヒヨラスニナビウケカリトナリ

今朝試上高枝採不覺傾翻仙

鶴巢 今朝先試ニナラフタルトホリ高キ
枝ノ上ニノボリ採ラントセシニオモヒ

カナス雀ノ巢ノアル
ヲヒツクリカヘセシト

如龍 松ノ木ノ皮ノ中ニ膽アリテ
狀龍ノ如シト抱朴子ニアリ

化石 六帖ニ云ク回紇ノ拔河
ニ古ハ康下ト云ノ川ア

リ松ヲ翻テ川ヲ投入レテ二年ニ
ナレハ化レテ石トナル世ニ康下石ト云

承朝言物 十八公 吳王圖夢腹上
公存尤所リ 松生ト見テ松字ヲ

別ハ十八公ナレバ後十八年ニシテ
官位三公ニ登ラント云フ果シテ其

話ノ 封大夫 秦ノ始皇泰山ニ
テ暴雨ニ逢ヒモ

如シ 封大夫 秦ノ始皇泰山ニ
テ暴雨ニ逢ヒモ

ヒシニ松樹ノ下ニ雨ヲサケタマフ
因テ其松ヲ封ジテ五大夫トス

靈岩寺 唐ノ玄奘西域ニ性
時吳岩寺ノ松樹ヲ

ナデ、曰ク吾西ニ去テ佛經ヲ求
本意ヲ達セバ汝西ノ方ニ長スヘシ

ト云ラキテ去リケル後此松西ニ指スニ
年忽チ其枝東ニ向フ弟子等三

テ吾師歸リ来ルヘシトテ
迎テ待クニ泉ニ玄并カス

迎テ待クニ泉ニ玄并カス

迎テ待クニ泉ニ玄并カス

迎テ待クニ泉ニ玄并カス

迎テ待クニ泉ニ玄并カス

迎テ待クニ泉ニ玄并カス

松品類

黒松雄松
常の松

赤松雌松もいふ葉細柱
等小用て楠よりわかく

朝鮮松本唐松のと葉長
色を分て直実と松子と

五葉の松葉わたく
みトわく色あかり

姫小松五葉い
似て葉わたく

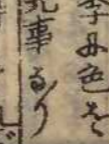
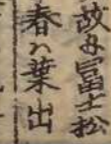
別のも多く花は用ゆ
駿州富士の辺み多くわたく故み富士松

とも葉を短く青く春の葉出
てて冬も落葉と此松四季み色を

夏の春の出葉は青く見事なり
夏もあがり秋黄み色つと得もいふ

冬はわたくて落葉して雪の降る
と花も枝ふたまる

事なくしてわたく



梅

昔ハ本朝花と称しつもの
梅ハ中世ハ花とハ櫻とハ

梅の種類

江梅 花大くして 大梅 花大くして
野梅 花大くして 小梅 花小くして

行幸梅 花大くして 鏡梅 花中より
豊後梅 花大くして 軒端梅 花中より

鶯宿梅 八重も一重もわり故事あり
飛梅 花大くして 難波梅 花大くして

梅異名 水姿 水肌 玉瑞 瓊枝 玉肌
土濁 逸民 雪魂 清容 木母 花魁

三凝紫 花儒者 好文木 故 繪旨梅
香敷見草 此花 春告草 白州

連句 後知 雅を看乃梅 宗祇
春風のを小梅 咲白ひる 紹巴

浴衣の多なるもよ梅の心 全
非周此花も白梅の筆 空

梅 痛くん程のわたくかさ嵐雪
梅 花の香りとわたく元政

わたくき枝のわたく梅の心 其角
梅 花のわたくは星の白ひる 全

梅 花のわたくは星の白ひる 全

梅 花のわたくは星の白ひる 全

梅 花のわたくは星の白ひる 全

梅 花のわたくは星の白ひる 全

母娘の梅もあけふきの梅のそ思貴
傍の梅もあけふきの梅乃梅移竹
三味線も小あきの梅梅れ来山

万葉 坂上郎女

妻されまけき 宿の梅れ花
ひより又くや春日ゆらん

夫木 為相卿

どうてえん彩の梅れれさ丹小
落くかりまを宿の一二えん

万葉 家持

みそのあけりききの梅乃花むま
あけふきのあけりきとありん

家集 西行

梅がとよみとらふゆきときて
入らび人より先よりの風

建保百首 定家

梅がやえうつらしん梅さる花
よるまほの花乃か見え

新撰六帖 紅梅 信実

常の梅はうひれさみ乃おろし枝
縁をまけりやのそやうらん

金葉 尋梅 為道

浅れそつゆくのそと梅のむ
そとともいれぬやひとあらん

夫木 春朝梅 家隆

結ぶるあきの星乃梅まのり
マセうら人も神白より森

新勅 夜梅 前突白

梅が香もあまの月ふまふつ
それとも見えんどうひじらう

夫木 夕梅 為兼

曉の風をまよひて妻乃花
このゆふをふそ初けをあゆる

家集 山辺梅 仲正

よつひれつら本はらじまふの
梅乃匂いそたさりのふせん

家集 垣根梅 仲正

白ひあろそ梅をよりぬまは
垣根乃梅のこころるりたり

夫木 家梅始聞 能因

云節いひもあけいつか
こが花室のそあけれみ本利

玉吟 曉梅 家隆

春のちのふちる月夜乃梅れむ
庭も中して雪解まそ

夫木 道梅 法印定範

乃のふ乃所見山のう光れくか
たらしほさうりま風をへく

白川 梅移水 頭輔

咲日たりむのをそとくゆりか
梅のうたゆく庭乃中り水

家集 湖辺梅 定家

をへそへる志笑はむのめほほと
雪さそへる那のまへへり

玉葉 月前梅 宗尊親王

梅の香は見えの春はさうりふて
去乃たもさうりむ月をけ

新續古 海辺梅 有親

延慶人のくくむ神も白くし
那波乃まき梅のうたう務

夫木 野外梅 光俊

志れえのう枕れ時梅まらふ
れての朝中れ神ふかあり

詞 くらきみ。うすねこそめ。白妙

咲らる。白く穿く。わさびつ下も

うつろふ。ゆりく。一ま。八ま。ゆらえ

志れえ。ゆらえ。山。谷。園。時。まか

きの梅。花の冬。路。さ。て。は。る。

詠家の梅。梅。軒。新。梅。の。梅。新

の梅。え。客。客。の。梅。え。ま。ま。ら。た

南は花。梅。梅。梅。賞。本。つ。ふ。唱

て梅。く。ふ。羽。風。も。白。く。梅。く。若。の

ゆ。て。ふ。ま。ま。梅。は。花。ま。柳。枝。う

を。春。眉。白。く。を。梅。く。白。く。若。く。そ。こ

き。白。く。風。う。る。月。白。く。み。ま。ま。じ。

それ。も。ま。ま。ぬ。ぬ。樹。若。若。さ。い。り。を

る。新。日。初。白。く。新。梅。の。梅。雪

ま。ま。め。白。く。う。白。く。若。若。さ。う。り

咲。夜。文。さ。く。白。く。い。た。れ。ぬ。子。梅。若。く

夏。の。梅。若。く。白。く。雪。い。た。れ。ぬ。子。梅。若。く

と。う。と。人。の。さ。む。し。の。香。若。く。さ。い

れ。白。く。梅。若。く。香。若。く。さ。い。若。若。さ

や。さ。つ。ん。賤。若。若。さ。い。若。若。さ

春の梅の影もあけぬ。由公の梅の影もあけてあけぬ。雨もあけぬ。

詩 梅ノ詞

張籍

自愛新梅好。行尋一徑斜。

梅ノ花サカリラシタニ往來心ニカラテ小路ヲ横斜ニカリミチヲツヅル人ハ不教入掃石恐損落來風

ノ石ヲハラフテラカスハ風ニ落松ニタル幾ラフミフセンモノヲトナリ

詩 梅ノ詞

曹彦謙

欲寫愁腸愧不才。愁ノコロロコイヲウフシバハント

思ヘトモ身不骨多情練瀝已低不サイナルラハハル

催云ヒムタキコトハカヅクアリテ已ニ詞ニイヒイダサントモヨウストナリ

窮郊二月初離別。故郷ヲバ二月比ニ別レテモノ

サビシクナツカ。獨倚寒村。鷓野梅シキトナリ

ワヒトリ村上ニアル野梅ノ花ヲ詠メ香ヲカイデ君ヲ思フナリ

詩 梅花七字對句

詩礎

柳條晴色不忍見。無數梅

梅花滿枝空斷腸。點人衣

寒澗渡頭芳艸色。弄綺梅

春梅嶺上鷓鴣聲。正調梅

詩 梅花五字對句

同上

梅花交近野。梅靜澄窓影

草色向平地。春明發筆光

梅故事

四維浮夢

陪の越師雄 日暮の羅

浮山の松間ニ酒肆ありて其地松葉服を美女と語りて香人を襲ふる

うらつと酒肆を叩きて共ニ酒を呑

醉臥して朝不起るをり見さへ梅樹

の下にありて酒肆 **梅曆** 山中ぬ
も美人もさしとて 住居

て春の至るとも、以梅花のゆきを
を見て春の来ることを、梅花曆と
す

詩話 蘇東坡の妹好の詩を
作るに東坡は、

山谷東坡小會と詩を作る時
東坡 和風掃細柳、澹月映梅花

と作る妹の云く未可あはれと
大母笑人山谷是を見て唱へて

和風舞細柳、澹日隱梅花
と作に、妹見て火く可くと

又東坡山谷の兩人妹ふむ、
汝の句い久し聞、妹詩と即時作

和風扶細柳、澹日隱梅花と
作り、まう二人も大か感と、

好文木 晋の哀帝書と、時ふ
四時と、梅の花開き

たりと、つう故ふ好文木と異名と
梅譜ふ、梅の花の儒者へ、

節分草 花は白花、一葉、
まづ咲く寒中より

葉と出、立春の頃、さく、
節分草と、俳諧節

分十二月の季、ゆへ是も名、
と、十二月と、是も所存、

土筆 筆つゝ、南方の諸草、
生と形筆乃如高、

福壽州 元日、花さく、
元日州とも、

詞 春の明の、若水、今別、
俳 佐保橋の、多の、梅、

狂 咲か、梅、去、歌、の、
後、さ、く、咲、み、け、し、

詩 福壽州、奉、對、句、
同上

淑氣煙相喜、瑞凝三秀州、
ハルキケリ、アイヨコロヒ、

風光草尚榮、春入万季秋、
フククハクク、カササカ、

福寿草七字對句

詩礎

豈知玉殿生三秀アニシラヤギヨクシヤウキヲシタ 瑞色鮮クワイヨクキヨクキ

詎有銅池出五雲ナシラシトウチイタス 動三辰ウツク

草芽半吐參差碧サウカナハクシサノモドリ 知春歸チハルカハ

花蕊初開淺淡紅ハナズクハジテヒクシタシラネオ 嬌朝花コウホウハニ

淺黃福壽草シヤウキウフシウソウ 二重ニヘ 白黃ハクキウ 淺黃シヤウキウ 見後ミノチ

八重福壽草ヤチヘフシウソウ 八重ヤチヘ 五六重イハヒツク 花の中ハナノナカ 黃キウ



罌粟新葉ウツロコノハ 九月クニツキ 種タネ 出デ 鮮シバシバ

若草ワカクサ 新草アタラシキクサ 初草ハジメノクサ 初ハジメ

家集

為家

春日ハルニチ 花ハナ のみひらきまにノミヒラキマニ つぶれてツブレテ だりもダリモ とるトル 春ハル のあきるノアキル 春ハル のあきるノアキル

詞ウタ けりケリ 天アメ のまをノマヲ あかしのアカシノ 庭ニワ のあきるノアキル

音ネ せきセキ のみノミ 庭ニワ のあきるノアキル

ぬヌ のあきノアキ 雑ザツ のあきノアキ 雑ザツ のあきノアキ

春ハル のあきノアキ 柳ヤナギ のあきノアキ 武ムス のあきノアキ

飛トビ のあきノアキ 柳ヤナギ のあきノアキ 武ムス のあきノアキ

大オホ のあきノアキ 柳ヤナギ のあきノアキ 武ムス のあきノアキ

日ヒ 斜シラ 江エ 止トメ 孤コ 帆ファン 影カゲ 州シウ 青アヲ 々々

州シウ 緑キナンド 湖ミヅウミ 南ミナミ 万マン 里リ 情ナヒ 花ハナ 州シウ 香カヲ

若ニホ 州シウ 五イハ 字ジ 對タイ 句ク 同上

遲トシ 日ヒ 江エ 山ヤマ 麗リ 野ノ 火ヒ 燒ヤク 不マ 盡マシ

春ハル 風カゼ 花ハナ 水ミヅ 香カヲ 春ハル 風カゼ 吹フク 又マタ 生ナ

河梁馬首隨春草 春州深

江路猿声愁暮天 百草生

曲江春草

鄭谷

花落江隄 族暖烟雨餘 州色遠

相連 春雨ノアカリニ草 香輪莫輾

青々破留與遊人一醉眠 醉眠

青タル草ノ上ニ車ヲキレラセ草ヲヤ

フリソコナフコナカレ野遊ノ人々ニ

トメテキアタヘントナリ

詩 同 唐羅鄴

芳草和煙暖更香 閑門要路

一時生 芳草ハヒロガリテ隱年々

點簡人間事 惟有春風不

世情 世間ニスノバ年々世話ノ

界ニテハタダ春風ノ

フクニキマカスノこと

下萌 冬かきこる草の春の出

發の氣かよて下まき出

洞外面の影。いふ約。日秋六園。

春雨の涼。春雨をどしせの詞。

新古今や久もゆかりあふみそ日

世てこすすをれ回のまうせううえ

木芽立 △木の芽 木の芽りや

非 非はれをいひの鞍 木の芽の

馬の木の芽かき 女羅 木芽漬

非 非はれをいひの鞍 木の芽の

防々木 木芽漬 越人 籬垣

薬 草木のきりぬぐり芽と生

春の艸のつるれは春季といひ

水菜

水入菜とよつり京都近

邊より生るとよはし

正月草木 生類 正八十五

蔓青の苗 本草の苗と食い初夏から

鶯菜 二月に食ふ

路臺 秋冬花 二月の草

田 二月の草

野大根 中めの草

生類 正月の部

猫の妻 二月の草

前後より 變ひ初る 春秋

二度さう 春ハ 牝を 喚び 秋ハ

牝と 喚んで 乳を 子と 生を

多く 産ち 七日 して 六十日 して

産じ 生まで 七日 して 眼と 口

飯と 二月 半と して 掛目 百

目さう 有て 乳さう 有ても

五月 一日 さう 暖かき 鼠と 食ふ

上旬 又は 頭より 下旬 又は 尾より

食ふ 猫の 眼まで 時刻と する 哥

六ツ 圓く 五八 玉子 四七 七ツ 棟の 実

の二種 あり 未 末 末 末 末 末

治諸虫入耳 耳に

取猫尿法 薑あつひん蒜と猫

此牙にわらうあつひの生葱を鼻のうらみ入きを猫ならしむる

白魚 異名鱈魚 **白魚** 尾 鱈魚六つあつひ其角

朝鷹 あさたか 一す鳥 鳴鳥 狩

今いこと久 貞徳翁の説云 實の樂鳴所を聞置未明ふたてたふきと

とす。朝鷹狩も。鳴鳥狩も又さぬ山。とまて狩る云々

とらふ鷹狩お出る時の鷹は鈴が付てらり此とものむらふこと

つとめとす。の口ふは見えとてさくさく鷹ハ神功皇后の時初て

百濟国より献とて古の堂上の觀せしむ其時先の手巻は

今武家の觀とて右の手居らるる

鷹 たか やくやくの鷹とてふこととて鷹狩人のまゝとてふは。ゆつと

雛子。ゆくり。若えたる。神の春風。茶

松。今ある目。花のくび。春のゆか

つと。神のくさ。鷹むる

継尾鷹 つぎお 白一條帝の御時源

鶴のさみちひと白と羽して

と見て山へくる心さうしめんて

鷹 たか 尾 鷹の尾をひき

足す。源頼政 **鷹** たか 尾 鷹の尾をひき

鷹 たか 尾 鷹の尾をひき

鳥 とり 鳥の尾をひき

非 鷓鴣も格わげ 浅刺 大さき
ありさうり時蛙夕

の如く色は色みふ同
事入りてひかりして美きす

飯鮓 異名 鱒魚 正二月の内盛
ふ出るりのきりたとの

肉 非 必 穢 入 冬 の 存 在 内 誰 烈

春駒 春ハ諸州生 出 故 駒
野とあれきり草と

喰ふ多し。諸家ハ養ひおこ
さる馬も初春ふりまはる

野と喰ふ野のこも哥の春乃
野ふわれゆきさぬをよむ。非

識ハ春駒とハハ初春の春
駒舞とるは春駒舞のこい

初春の部ハハハ
春駒。春駒舞のあろを

非 表 約 の さ と ぬ 志 宗 阿

必用

此部ハ正月一ヶ月の天
氣の見テ其外必用の事との

破	暮六ツ	夜五ツ	夜四ツ
軍	丑の方	寅の方	卯の方
星	辰の方	巳の方	午の方
向	朝六ツ	朝五ツ	昼四ツ
方	未の方	申の方	酉の方
角	昼九ツ	昼八ツ	昼七ツ
	戌の方	亥の方	子の方

右の如く正月酉の刻迄ハ破軍の
斂鋒せの方ハ向ハ戌の刻物迄ハ

寅の方ハ向ハ亥の刻時辰の方
小向ハ次第ハ順ハ一時宛とあつる

○酉の時より操出と事ハ星ハ夜
主とるゆへ暮六ツ時より出初る

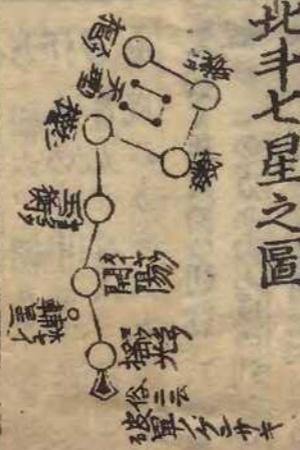
破軍のたゞは向ハ方ハむい合
かありて争論又何事ハむい合

万事利ありは是天地の氣令の
應とる處とるハ能ハハハハハ

○三才圖會曰く昔唐虞の世ハ正
月酉の刻ハ破軍星寅の方ハ向

とくど 紀夫より年数久しくつりて天の旋山宛 昏と今とてハ口ふのづからあつゝ向ふかり日本ハ神代より正月を寅の月と定む北斗と見せぬれば時刻を知らば 晴雨とも知るべしあれがため

北斗七星之圖



第一の星と樞と云第二と璇と云第三と璣と云第四と權と云第五と璣と云第六と開陽と云第七と樞光と云巽と右三星の名を杓と云

天氣 北斗魁星の間黒くはや光とありて長三丈余り

あまの其夜雨ふる○北斗の前に黄なる雲氣あまの翌日風ふくむはや光とありて其夜大よ雨ふる○黒く黄く白くはや光とありて長三丈余りあまのく北斗とまゝいて散るまば三日の内から雨降りさあけまば人安和なる事なりとあり○り雲氣北斗とまわるとありて蒼黒さの大きふ雨ふる黒ろさの風多し黄白されの翌日大に熱し○白氣ありて北斗との間とまゝいてまば三日の内から大風ふる事とまゝは是正日にあまのく月のふては同一事なり○今月稲ひらう有る人民は殊あり○今月上旬の雨多し○今月上旬の雨多し○今月上旬の雨多し

天氣占候 今月上旬雨多く中旬の米價貴し

正月月令必用

正九十一

雨も米價亦貴一〇甲乙の雨

ふまに春中雨多一丙丁の雨ふ

まに夏雨多一〇庚辛は日雨ふ

は冬雨多一〇今月中零雨ふ

秋不至一〇日刻万事刻限と定

出水あり 日刻 万事刻限と定

の日寅の刻。丑の日丑の刻万の

事ととらふ用也が守利のさる

出行作事 正月の天道南ふ

まに出行きも南の樂事と

方に向て吉なり

けく日光も美しくて父母の壽

親族相識互ふ賀し心も

待立勇一梅の色香諸木

勝を鷺の吉の若やふ

薄く霞める遠山の若一

何々長開けつゝさるん

正月飲食 料理献立

禁酒肉は月々の神祇儀

物への奥は持たはせ

はるかたの鯛魚頭

まふたの魚も鯛魚肝

まふたの魚も鯛魚肝

まふたの魚も鯛魚肝

まふたの魚も鯛魚肝

まふたの魚も鯛魚肝

まふたの魚も鯛魚肝

あび 煮物 煮物 煮物

さんご 煮物 煮物 煮物

せんご 煮物 煮物 煮物

煮物 煮物 煮物 煮物

せんご 煮物 煮物 煮物

せんご 煮物 煮物 煮物

せんご 煮物 煮物 煮物

せんご 煮物 煮物 煮物

せんご 煮物 煮物 煮物

せんご 煮物 煮物 煮物

せんご 煮物 煮物 煮物

せんご 煮物 煮物 煮物

せんご 煮物 煮物 煮物

せんご 煮物 煮物 煮物

せんご 煮物 煮物 煮物

せんご 煮物 煮物 煮物

せんご 煮物 煮物 煮物

せんご 煮物 煮物 煮物

せんご 煮物 煮物 煮物

せんご 煮物 煮物 煮物

せんご 煮物 煮物 煮物

せんご 煮物 煮物 煮物

あび 煮物 煮物 煮物

さんご 煮物 煮物 煮物

せんご 煮物 煮物 煮物

煮物 煮物 煮物 煮物

せんご 煮物 煮物 煮物

せんご 煮物 煮物 煮物

せんご 煮物 煮物 煮物

せんご 煮物 煮物 煮物

せんご 煮物 煮物 煮物

せんご 煮物 煮物 煮物

せんご 煮物 煮物 煮物

せんご 煮物 煮物 煮物

せんご 煮物 煮物 煮物

せんご 煮物 煮物 煮物

せんご 煮物 煮物 煮物

せんご 煮物 煮物 煮物

せんご 煮物 煮物 煮物

せんご 煮物 煮物 煮物

せんご 煮物 煮物 煮物

せんご 煮物 煮物 煮物

せんご 煮物 煮物 煮物

せんご 煮物 煮物 煮物

うんのことすうまを銅をくし
 してすい煮る○〇の鯛がや
 けろ子とふたすきさうゆ
 小てかひをて出さる鯛も子
 も入らてまうて出さる(一)に
 ていあし○さうろこいりこ
 せん(二)さざなみくゆに(三)さ
 さうゆ(四)も出さる○あん(五)
 汁(六)ういそ(七)た(八)あ(九)ち(一〇)切(一一)て(一二)か(一三)い(一四)て
 も身(一五)と(一六)少(一七)湯(一八)入(一九)ち(二〇)こ(二一)る
 時(二二)あ(二三)け(二四)て(二五)水(二六)も(二七)多(二八)し(二九)其(三十)後(三一)酒
 を(三二)の(三三)置(三四)て(三五)汁(三六)少(三七)入(三八)ん(三九)こ(四十)る
 魚(四一)を(四二)入(四三)時(四四)鳥(四五)は(四六)ん(四七)か(四八)も(四九)
 (五〇)す(五一)物(五二)鳥(五三)う(五四)ぐ(五五)そ(五六)ま(五七)あ
 野菜(五八)ふ(五九)き(六十)う(六一)ど(六二)ま(六三)づ(六四)み(六五)あ(六六)
 (六七)く(六八)よ(六九)あ(七十)ま(七一)く(七十二)こ(七十三)春(七十四)菊(七十五)
 や(七十六)う(七十七)ま(七十八)ん(七十九)そ(八十)う(八十一)こ(八十二)の(八十三)を(八十四)ふ(八十五)か(八十六)い(八十七)
 せ(八十八)ん(八十九)さ(九十)う(九一)こ(九二)や(九三)り(九四)ほ(九五)く(九六)く(九七)
 う(九八)こ(九九)ど(一〇〇)た(一〇一)ん(一〇二)や(一〇三)え(一〇四)ん(一〇五)水(一〇六)も(一〇七)入(一〇八)
 る(一〇九)ろ(一一〇)ろ(一一一)の(一一二)ゆ(一一三)ら(一一四)ふ(一一五)い(一一六)す(一一七)ち

煮漬物

重紐
 小片
 口
 口
 口
 口

さん(一)きん(二)さん(三)さん(四)ん(五)ゆ(六)り(七)飯(八)
 う(九)ら(一〇)め(一一)ね(一二)ち(一三)な(一四)け(一五)
 漬(一六)け(一七)り(一八)や(一九)う(二〇)ら(二一)ね(二二)甲(二三)り
 む(二四)の(二五)い(二六)も(二七)長(二八)い(二九)し(三十)板(三一)甲(三二)り
 う(三三)ど(三四)ま(三五)め(三六)け(三七)ふ(三八)ら(三九)を(四十)
 思(四一)ひ(四二)け(四三)○右(四四)角(四五)各(四六)二(四七)三(四八)気(四九)注(五十)す

細重

大者
 小者
 細重
 細重

子(一)ん(二)こ(三)ゆ(四)き(五)拾(六)ち(七)ま(八)た(九)う(一〇)
 生(一一)貝(一二)さん(一三)こ(一四)ん(一五)こ(一六)ん(一七)こ(一八)ん(一九)
 向(二〇)美(二一)考(二二)る(二三)子(二四)小(二五)串(二六)い(二七)れ(二八)
 は(二九)い(三十)考(三十一)り(三十二)小(三十三)串(三四)い(三五)れ(三六)
 ど(三七)こ(三八)ゆ(三九)一(四十)厚(四一)き(四二)こ(四三)ん(四四)
 小(四五)串(四六)田(四七)菜(四八)お(四九)ろ(五十)け(五一)こ(五二)ん(五三)
 車(五四)を(五五)ひ(五六)小(五七)串(五八)向(五九)美(六十)考(六一)る(六二)子(六三)
 多(六四)う(六五)け(六六)生(六七)貝(六八)さん(六九)こ(七十)ん(七一)
 拾(七二)て(七三)ん(七四)く(七五)小(七六)串(七七)い(七八)れ(七九)
 押(八〇)玉(八一)子(八二)押(八三)玉(八四)子(八五)

正月 飲食

正料 二

精進 膳 形 大 人 三 五

料 理 膳 形 大 人 三 五

膳 形 大 人 三 五

膳 形 大 人 三 五

膳 形 大 人 三 五

膳 形 大 人 三 五

膳 形 大 人 三 五

膳 形 大 人 三 五

和物 膳 形 大 人 三 五

膳 形 大 人 三 五





和書	内閣文庫
類	110111
冊	1
號	110111
額	2817